十月八日　　秀吉（朱印）

加藤孫六（嘉明）殿

書狀披見候、方々遣候返事、并大柿普請之樣子見屆指圖上候、得心も何も可然候、其通可申送候、猶垣見、祖父江兩人可遣候條、其時可申聞候、謹言、

十月十七日　　秀吉（朱印）

加藤孫六殿

加藤嘉明

大柿城普請

秀吉紀伊ヲ攻メントス

羽柴長秀

爲其表見廻、垣見彌五郎、祖父江久内差越候、南方動留主（甘）中儀用心等無由斷可入精事肝用候、自然敵相動候共、卒爾ニ不可出入數候、於樣子者美濃守（羽柴長秀）可申候、猶兩人相含口上候、謹言、

十月十七日　　秀吉（朱印）

加藤孫六殿

○本月八日及ビ十七日、秀吉、美濃、尾張在城ノ諸將ヲ戒ムルコト、便宜合敍ス、

是ヨリ先、羽柴秀吉、若狹ノ諸寺ニ鐘ヲ徵ス、是日、又近江ノ新庄藏人ニ命ジテ、同國長濱等ノ諸寺ノ鐘ヲ徵セシム、

新庄藏人若狹ノ鐘ヲ請取ル

織田信長百濟寺ヲ火ク千手坊仙忠等再建ニ從フ

〔秋山斷氏所藏文書〕（伊勢）○

從若州之鐘、其方請取置之由尤候、長濱之城并其外之寺ニも、鐘可在之候、面々上ニ朱にて書付をさせ候て、有次第可取置候、何も自是左右を可申遣者也、

（天正十二年）十月七日　　秀吉（朱印）

新庄藏人殿

○秀吉、新庄藏人ニ命ジテ、池田照政運送ノ船鎖ヲ近江中之河内ニ遞送セシムルコト、十三年三月一日ノ條ニ見ユ、

近江佐和山ノ堀秀政、同國百濟寺本堂ヲ再建ス、

〔百濟寺棟札〕（近江）○

天正拾貳年甲申拾月七日

當寺本堂御再造羽柴左衞門督（秀政）

（裏）天正元年癸酉、當山堂社坊宇爲ニ兵火一燒亡、本尊觀音大士奉レ隱ニ西峯不動堂一、僧侶散ニ在所々一、三年乙亥、千手坊仙忠、岩本坊尊海、從ニ大荻邑一歸、實相房祐運、光淨院主等者自ニ鄕内一歸

天正十二年十月七日

山、而造二草堂一還二座本尊一、再二興當寺一、雖レ然制未レ具故、羽柴左衛門督豊臣秀政、當國澤山城主、前名堀久太郎、請レ重二建本堂一、秀政卽諾、十二年甲申十月七日、堂成、堂間七間四面、建二舊蹟一衆徒等願圓慶讃供養矣、是其棟札、予爲二後證一加二裏書一者也、

時享保十七年龍集壬寅秀春十八日、岩本中興八世證知院法印卽應記レ之、（コノ棟札ノ原寸ハ、姑ク附セズ、）

○織田信長、百濟寺ヲ火クコト、元年四月七日ノ條ニ見ユ、

〔附錄〕

〔百濟寺文書〕（近江）

當寺雜說之儀、何者申出候哉、曲事ニ候、聊不可有異儀候條、可得其意候、若理不盡之族於在之者、搦取可申越候、猶村井孫兵衞、鵜川喜左衞門尉可申候、恐々謹言、

村井孫兵衞
鵜川喜左衞門尉

久太郎
秀政（花押）

三月十八日

百濟寺惣中

肥前高尾ノ田尻鑑種、島津忠平（義弘）ニ二心ナキコトヲ示ス、

〔上井覺兼日記〕十九　拾月、

一七日、（中略、合志親重、使ヲ覺兼ニ送ルコトニカ、ル、九月二十一日ノ條ニ收ム、）田尻鑑種より、密々ニ使進入候趣者、當時高尾（肥前佐賀郡）之城ニ入部候へ共、妻子等龍造寺質入ニ召取候條、別心なく候ても、一途御奉公難成候、於心底者、此前ニ相異候へぬ由共也、當時江之浦（筑後山門郡）之事豊後衆下知にて、龍造寺にもはなれ居候、然者鑑種本々之内衆七八十人も、于今江之浦ニ留居候、彼等ニ内略共候間、三池（鎮實）上總守へ被仰談候へ、、彼方へ談合申候て、江之浦之事輙可仕返（取カ）之由也、吾々面談ニ巨細等鑑種使ニ尋候也、（下略、覺兼、忠平ヨリ金瘡醫術ヲ受クルコトニカ、ル、九月二十一日ノ條ニ收ム、）

鑑種妻子ヲ龍造寺政家ニ質トス

○肥後ノ小代親泰等、島津義久ニ降ルコト、本月一日ノ條ニ見ユ、

八日、辛亥、羽柴秀吉、壇榮清ヲ石清水八幡宮社務職ニ補ス、

〔石清水文書〕六　菊大路家文書

石清水八幡宮社務職之事、任先例被仰付上者、速可被存知其旨者也、

天正拾貳年十月八日　秀吉（花押）

八幡宮壇榮清

〔石清水文書〕三　田中家文書

（端裏書）「八幡壇榮清書付案文」

一等持院（春氏）殿、寶篋院（義詮）殿御兩代、相つゝき、壇崇清持申吉例之事、

一勝定院（義持）殿御代、長德院（義益）殿、此御兩代善法寺宋清相つゝき持申候、吉例之事、

天正十二年十月八日

社務次第ノ勘例

一普廣院(義教)赤松御腹めさせ替事、不吉之御事、
一慶雲院(義勝)殿十歳にて御他界、不吉にて相かわり申候事、
一大智院(義親)殿壇庸清こ而御座候を、田中奏清書被申候事、不謂、
一惠林院(義稙)殿、嶋公方(義澄)様御親父御牢人被成、今こ天下へ無御上洛候、其時社務田中奏清にて御座候、不吉例之事、數代御牢人にて、都無御存知候事、
一萬松院(義晴)殿御代善法寺掌清にて御座候を、相つゝき西竹交清田中被書付候、相違、光源院(義輝)まて相つつき、二代善法寺掌清持申候、吉例之事、
一嶋公方(義澄)様御牢人にて、今こ天下へ無御上洛候、其時社務新善法寺照清不吉、相かわり申候事、
一靈陽院(義昭)殿より信長様まて相つゝき、社務善法寺堯清持申候事、
一靈陽院殿御代、田中御書付無御座候事、
一大閤(太)様より秀頼様まて、相つゝき社務壇榮清こ被仰付、天下泰平砌兩人望申段不謂候事、

當宮社務職持口近代之覺
○中略、永正五年以來社務職持口ノコトニカヽル、

天正十二年
一秀吉様　同十二年　壇榮清

里村昌叱、父昌休ノ三十三回忌ニ當リ、連歌ヲ行フ、

〔千句聞書〕○肥後　天正十二年神無月八日昌休三十三廻於昌叱

山何第一　秋
無跡をとふ袖見する時雨哉　(里村)昌叱
うつむ落葉をはらい入山　(聖護院道澄)白
春近き太谷のかたへ梅咲て
何船第二
散て猶木のもとふかき紅葉哉　(前田)玄以
夕霜さむき庭のかたへら　文閑
風吹は月も籬の隙もりて　孝也
何路第三
うき世かな月出てよりさ夜時雨　(里村)紹巴
かれ野を跡の袖の松風　宗色
渡し舟氷る汀にさし捨て　既在

聖護院道澄
前田玄以
文閑
里村紹巴

天正十二年十月八日

天正十二年十月八日

何人 第四

花にみし苦地おとろく落葉哉　里村心前

とひよる宿の月は冬の夜　悲云

暮初る空ハ嵐の雪はれて　全底

何木 第五

雲となるおも影しるき時雨かな　津田宗及

むかふもとをき雪の山のは　秋

朝な〳〵花の青葉や添ぬらん　昌叱

一字露顯 第六

朽ぬれは猶みかくれの落はかな　英帖

氷りのとつる池のすて舟　白

秋もはや有明の月の砌りにて　玄以

朝何 第七

枕よりしくれて空は雲もなし　津田正繁

たもとにさゆる里のさ夜風　能札

端近き床ハ簾を引敷て　紹巴

何衣 第八

風の音も積る砌りの落は哉　文閑

朝戸ひらけはみそれせし跡　心前

移る日の影もしハしハ寒〳〵(くしカ)て　宗知

初何 第九

年の矢のいつれ袂の夕時雨　昌叱

あられみたるゝ比に成る山　玄以

枯生より小篠の末のそよめきて　秋

何鳥 第十

春秋の色も夢なる落葉哉　白

したふにくるゝとし〳〵の空　紹巴

かへるへき都を跡にへたてきて　秋

九日、壬子、羽柴秀吉、紀伊ニ兵ヲ出サントシ、一柳末安ニ命ジテ、大坂附近ニ著陣セシム、

天正十二年十月九日

天正十二年十月九日

〔淡輪文書〕坤 ○紀伊

以上

先度者早々使札、殊御懇意之儀共、本望候、其後以書狀可申入之處、手前取亂令無音候、御所勢之由、無御心元候、秀吉出馬可爲近日之條、無御油斷、被加御養生、此刻別而御忠儀專用候、我等式當城在之事候之條、自然之御用不可有疎意候、猶追々可申承候、恐々謹言、

中村孫平次
一氏（花押）

（天正十二年下同ジ）
六月廿一日

徹齋公

淡輪太和守殿御宿所

中村一氏秀吉ノ出馬近キコトヲ淡輪ニ徹齋等ニ告グ

〔伊豫小松一柳文書〕○伊豫

二十七日出馬スベシ

秀吉公御朱印

來廿七日、至于南方可出馬候之條、無由斷有用意、大坂近邊（邊）へ、廿四五日比可有著陳候、人數等一廉之馳走尤ニ候歟、追々可申候、謹言、

十月九日
一柳市介（末安）殿

○秀吉、和泉願泉寺ニ禁制ヲ下スコト、便宜左ニ合敍ス、

〔願泉寺文書〕○和泉

就出馬之儀、當寺內陳取幷諸卒出入事堅令停止訖、若於違犯之族者、可加成敗者也、

十月廿七日　秀吉（花押）

寺內
貝塚

長宗我部元親等、讃岐松尾寺仁王堂ノ建立ニ奉加ス、

〔金刀比羅宮棟札〕○讃岐（來）

封　元親　封

上棟奉建立松尾寺仁王堂一宇

聖主天中天　金輪聖皇天長地久、御願圓滿、天下
迦陵頻伽聲　哀愍衆生者
我等令敬禮　特者寺中富貴、人法繁昌、庄內安穩、

泰平、興隆佛法焉、
諸人快樂祈之所矣、天正十二甲申季十月九日

大檀那大梵天王長曾我部元親公　次男五郎次郎　三男彌次郎　乙虎王丸　左京進親英　同五郎左衞門尉　付リ惣領信親卿香川　大工仲原朝臣金家　小工藤原朝臣金國　并諸旦那等

大願主帝釋天王權大法印宗信

封

大檀那長宗我部元親

天正十二年十月九日

（裏）

永

別當權僧都　宥嚴當山ニ瓦ノ土近來雖無御座候、今此上人依加護、本尊立之寺内上

供僧衆　地藏寺　寶光坊　妙安寺　增泉坊　榎井坊　勢滿寺

之土顯現ス、奇特驚万人耳目、者也、杣番匠□□□藏坊（タトワ）千松家次也、鍛冶（治）大工傳左衞門尉　瓦大工（ウタツ）三郎左衞門

百性（姓）中　當寺西琳坊

寺天次郎兵衞　右筆權少僧都宥濟

諸ヒ官等　振　猪　尾

○原寸長一・六三七（米）　幅上〇・一四七（米）下〇・一三七

郡司不入

御師藏田左京亮

十日、癸丑、上杉景勝、舊ニ依リ、領内ノ伊勢大神宮領ニ諸役ヲ免除ス、

〔伊勢古文書集〕二下　○伊勢

伊勢領之事、如前々停止諸役、郡司可爲不入者也、仍而如件、

天正十貳年　拾月十日　御朱印

○年月日ニカケテ、上杉氏ノ朱印ヲ模セリ

御師　藏田左京亮とのへ

糸魚川ノ内押上新町

泉澤久秀

（西頸城郡）糸魚川内伊勢領之事、停止諸役、不入被成置候、此外法憧寺領爲替地をしあけ（押上）、新町何も同前ニ被下置御朱印候間、可得其意候、仍如件、

天正十二年　拾月吉日　泉澤（久秀）

（花押）

藏田又五郎殿參

○景勝ノ老臣直江兼續、皇大神宮御師藏田左京亮ニ書ヲ與ヘテ、越後糸魚川同宮領ノ夫役ヲ定メ、同國一宮蓮臺寺ノ町屋ヲ安堵セシムルコト、十一年五月十二日ノ條ニ見ユ、

十一日、甲寅、誠仁親王、和仁王、松尾社ニ詣シ、西芳寺、天龍寺、清涼寺等ヲ遊覽シ給フ、

〔兼見卿記〕七　十月八日、辛亥、勸修（晴豐）寺使者來云、明後日十一日、親王（誠仁親王）御方嵯峨ヘ行啓供奉之儀被仰出、畏之由申入了、

九日、壬子、向勸亞相、十一日御供之儀相談、各乘馬異躰也、外樣内々各供奉之由被申了、

十日、癸丑、唯神院（吉田兼右）殿社參燒香、次出京向勸亞相、明日之儀治定之由被申了、罷歸用意申付了、

明日者未明云々、

天正十二年十月十一日

出御
供奉ノ廷臣
西芳寺
松尾社
臨川寺
天龍寺
大覺寺尊信
曲直瀬玄朔
清涼寺本尊開帳

十一日、甲寅、自夜半ゟ用意、未明出京、先向勸亞相、時分漸也、万里(光房)少路罷出、可見合之由被申之間、卽罷出了、暫相待出御、北之土戸ヨリ御輿ヲ入出御也、次若宮(和仁王)御方御輿ヲ入、其外御局衆御門外ヨリ御乘輿、二宮、三宮各御成、御輿七張、荷輿一、勸修寺前ヲ北ヘ被出一條ヘ、此時各乘馬、第一飛鳥井亞相(雅春)、二柳原亞相(淳光)、三甘露寺亞相(經元)、四勸修寺亞相、五中山黃門(親綱)、六庭田黃門(重通)、七日野黃門(輝資)、八廣橋(兼勝)、(マヽ)九坊城(俊廣)、十五辻源三位(晴仲)、十一內刑竹部卿(長治)、十二予、十三中山頭中將(慶親)、十四伯其外次第也、各跡ヨリ三條亞相(實綱)、行路一條辻ヨリ室町ヲ下ヘ四條マテ、是ヨリ西壬生通ヲ直ニ、西方寺(芳)ヘ御成、於此所、御輿ヲ立ラル、屢御逗留、住寺長老歟罷出御禮ヲ申、御菓子、御樽ヲ進上、有一獻之儀、各於庭上御通有之、御逗留之內、二宮大覺寺殿御弟子御煩氣也、暫御休息、次松尾ヘ御成、神前廻廊ニ於テ立御輿、社務進上御樽、在一獻之義、各御通在之、次臨泉寺(川)ヘ御成、泉水庭古跡也、被立御輿、住寺善正院之長老也、申御禮、獻御樽、及晚之間獻盞之儀無之、次天龍寺ヘ御成、於方丈御膳、一獻之儀在之、次座敷ニ於テ、任位次對座、在一獻之儀、御酒已下數盃、次於御前御通、位次次第也、及暮之間御掌燈、ラツ燭也、此時分大覺寺門主(尊信)御參、於御前數盞之儀在之、當住被召出、被下御盃、廿帖、杉原(厚)、段子一段(緞)、拜領之、次道三(曲直瀨)玄朔被召出御前、御太刀拜領、此度之御成玄朔申沙汰之云々、不知御前之儀、次座敷各ヘ之仕立麁草法外沙汰之限也、勸亞相、休庵(久我通興)取持也、夢々不及其沙汰、次還御已刻、直ニ嵯峨(清涼寺)ヘ御成、本尊

還御
梅若大夫勸進能

此義大門主沙汰之也、暫於佛前被立御輿、女中各屢御逗留在之、尊像心靜拜見申訖、自是還御、夜半時分御殿ヘ入御、各致供奉退出訖、予(青侍、中間、人夫、十人、十人、七人、笠已下持之、丑刻歸宅、

十二日、乙卯、齋了出京、向勸亞相、昨日御禮罷出也、御局口迄令禮候、可申入歟如何、其分可然之由諷諫、中山黃門、伯參會、此內道三玄朔來、亞相申禮、卽罷出也、予參大御乳、昨日之申入御禮、直ニ歸河東、路次雨降、昨日十一日ヨリ於下御靈、梅宮(若カ)大夫勸進能仕云々、當番也、伯ヘ相談可參勤之由同心、

〔言經卿記〕五　十月十一日、甲寅、天晴、

一宮御方嵯峨西芳寺等御見物ニ御成云々、堂上衆各御供也云々、後日相尋可記也了、(十三日ニ大略記之、)

十三日、丙辰、天晴、

一去十一日、宮御方西山邊御見物了、路次一條室町四條マテ、其ヨリ西院西梅津也、先西芳寺御見物、住持御樽進上、次松尾社御參了、社中御樽進上、次天龍寺方丈ニテ、三獻已下各ヘ振舞等、醫者玄朔進上申云々、則御太刀拜領也云々、入夜御還御、御同道衆若宮御方、二宮御方、五宮御方等、御阿茶ニ御阿子其外御乳人各被參了、堂上衆は馬上、袴肩衣也、飛鳥井大納言、按察使(庭田)、柳原大納言、甘露寺大納言、勸修寺大納言、三條大納言、持明院中納言、源中納言、庭田、中山中納言、日野中納言、廣橋中納言、菅(マヽ)坊城、大藏卿、五辻、刑部卿、竹內、左

衛門督、吉田、慶親朝臣、中山頭中將、雅朝々臣、伯中將、時慶朝臣、西洞院、秀滿朝臣、藪中將、爲良朝臣、五條、有親朝臣、六條少將、雅繼朝臣、飛鳥井少將、賴宣、葉室、宣光、中御門、久脩、土御門、諸光、薄、光豐、勸修寺左衞門佐、藤原秀直、富小路極薗等也云々、傳聞分也、

○誠仁親王、和仁王、醍醐寺理性院ニ遊ビ給フコト、十三年三月十九日ノ條ニ見ユ、

德川家康、尾張小牧ヲ巡視シ、松平家忠ヲシテ、同國小幡ヲ守ラシム、

〔家忠日記〕三　十月八日庚辛戌雨降、

九日、辛壬亥、

十日、壬癸子、子丑、

十一日、癸甲丑、家康小牧ヘ御見舞御越候、小幡定番候儀被仰付候、

十二日、甲乙寅、寅卯、雨降、

○家康、小牧ノ壘ヲ修スルコト、本月四日ノ條ニ見ユ、

北條氏直、上野小泉ノ富岡對馬入道ニ書ヲ遣リ、番替トシテ、山中大炊助ヲ遣セルヲ告グ、

〔富岡家古文書〕○內閣文庫所藏

其地爲番替、山中大炊助指越候、万端相談尤候、恐々謹言、

（天正十二年）十月十一日　氏直（北條）（花押）

富岡對馬入道殿

○瀧川一益、小泉城將富岡六郎四郎ニ書ヲ與フルコト、十年六月十一日ノ條ニ見ユ、

大友義統、後藤右衞門尉ノ筑後在陣ノ功ヲ褒ス、

〔碩田叢史〕四十二乾古文書

今度至筑後表從寂前遂在陣、猶所々軍勞之由感入候、彌可勵馳走之袁肝要候、必追而一段可賀之候、尙丹生田丹後守可申候、恐々謹言、

（天正十二年）十月十一日　義統

後藤右衞門允（尉）殿

○義統、衞藤統門、志賀紀伊介ノ功ヲ褒スルコト、本月一日ノ條ニ見ユ、

肥後阿蘇ノ宇治長松丸、（惟光）物ヲ贈リテ、大友義統ニ筑後ノ戰勝ヲ賀ス、尋デ、義統、之ニ答フ、

〔阿蘇文書〕二阿蘇文書寫三十六

丹生田丹後守

筑後表案裏ニ屬ス

筑後表之儀、悉被屬案裏之由候、尤肝要候、此等之儀、早々可申候處、無音非疎意候、何樣代々

天正十二年十月十一日

片色

無二之辻、向後倍無變化可申談候、御同前可爲本望候、仍片色一端縮進之候、補禮儀計候、猶宥職房可申候、恐々謹言、

天正十二年甲申十月十一日　惟光御事　長松丸

大友殿

上かき此分にて候、そは付、うら付あへるからす候、

大友殿　長松丸

筑後表悉被屬御案中由候、千秋万歳候、爲此等之御祝儀、長松丸被用使書候、年少之儀候、向後別而可被添貴意事所仰候、代々被得御指南候辻、何樣永々不可有別儀候、旁宜預御披露候、恐惶謹言、

天正十二年きのへさる十月十一日　柏治部少輔　惟具　村山美濃守　惟尙　西越前守

仁田水惟榮　志賀道輝

返札

就筑後表勝利之儀、早速示給候、代々無二申談首尾、誠御賴敷存候、彌堅固加下知候之條、方々可屬案中事、不可有程候、將又、其堺之儀、毎事無油斷才覺肝要候、仍太刀一腰金、片色一端送給候、祝著候、猶宥職坊可被相達候、恐々謹言、

（天正十二年下同ジ）十月十八日　義統

阿蘇殿

阿蘇殿　義統

上かき此分にて候、そは付なく候、うら付なし、

就筑後表勝利之儀示給候、祝著候、代々無二申談首尾、案中候、彌無變化可預入魂事肝要候、必自是可申候條、閣筆候、猶志賀伊（道輝）勢入道可申候、恐々謹言、

天正十二年十月十一日　志賀安房入道（道輝）殿　惟延　仁田水左衞門大夫　惟榮

十月十八日

仁田水左衛門大夫殿
西越前守殿
村山美濃守殿
柏治部少輔殿

○阿蘇大宮司宇治惟種、歿スルコト、八月十三日ノ條ニ、戸次道雪、高橋紹運等、筑後草野、妙見等ヲ侵スコト、十月三日ノ條ニ見ユ、

十二日、乙卯、徳川家康、甲斐波木井ノ波木井四郎左衛門ニ同國下條ノ地及ビ澁澤ノ家屋ノ諸役ヲ免ズ、

〔齋藤文書〕二　○陸前

下條分十貫文
本多正信
大久保忠泰

甲州下條分拾貫文、澁澤内屋敷壹間諸役免許等之事、
右爲新給領掌不可有相違者也、仍如件、

天正十二年
十月十二日　本多彌八郎（正信）
奉之
大久保新十郎（忠泰）

（附箋）「十月之上ニ御朱印御座候、」

波木井四郎左衛門殿

小早川隆景、書ヲ渡邊但馬守ニ與ヘテ、筑前山鹿ノ警備ヲ嚴ニセシメ、併セテ東國、北國等ノ形勢ヲ報ズ、

〔麻生文書〕二　○筑前

麻生隆實
秀吉尾張ニ在陣ス
北國ニテ大合戰
伯耆八橋ヲ牢人等占領ス
渡邊但馬守

從麻生隆實方林越中守被差上、條々被申上趣、以渡邊石見守（長）、長井筑後守（親房）兩人慥披露候、委細被成其御心得、御返事被仰渡被差下候、山鹿之儀（筑前遠賀郡）何と様こも堅固可被相拘事肝要之由候、證明人、置兵粮等之事、被成其御分別候可然候、先年以來之趣、書中具披見無忘却候、對彼父子（麻生隆實、家氏）彌可被副御心之由候、隨而東國之儀于今鉾楯半候、尾州表羽筑（羽柴秀吉）聟与在陣候、北國之儀も佐々内藏助（成政）徳川へ申合現形ニ付而、廿日以前大合戰候、如何可成行事候哉、先以近日羽筑も可引退之由被申越候、今度伯州八橋之儀、牢人衆不慮ニ仕取候、是も至尾州陣所申上候之條、下知可有之候、吳々下目之儀彌被聞合、至奉行中重々注進肝要候、猶期來音候、恐々謹言、

（天正十二年）十月十二日　小早川隆景（花押）

渡邊但馬守殿　進之候

是ヨリ先、屋山三介、築瀨三河入道等、高橋紹運ノ居城筑前岩屋ヲ留守ス、

敵中ニツキ攻口同前ノ辛勞

是日、大友義統、三介ヲ褒ス、尋デ、又三河入道ヲ褒ス、

〔三原文書〕○筑後

今度從最前高橋主膳（紹運）入道任申旨軍勞、就中至岩屋要害勤番之由ニ候、如此大篇之刻、貞心之覺悟偏對國家忠節之條感入候、何樣取鎮、紹運申談可加扶持候間、彌馳走肝要候、恐々謹言、

（天正十二年下同ジ）十月十二日　　義統有判

屋山三介殿

御直判　同名久馬助所へ有之、

今度高橋主膳入道至黑木表越山之刻、其方事岩屋城爲在番被殘置之由候、敵中之間、攻口同前之辛勞感入候、雖無申迄候、彌不可有油斷候、恐々謹言、

十月十八日　　義統有判　○宛名闕ク、

御直判　同名久馬助所へ有之、

〔大友家文書錄〕六　義統

今度高橋主膳入道到黑木表越山之刻、其方事居城（岩屋城）爲勤番被殘置之由候、其堺之儀も敵中候之間、攻口同前之辛勞感入候、雖無申迄候、彌不可有油斷之儀候、必追而一段可賀之候、恐々謹言、

十月十八日　　義統在判

築瀨三河入道殿

○義統、築瀨三河入道ノ筑前寶滿ニ籠城セル功ヲ賞シ、同三井郡ノ地ヲ與フルコト、十一年十二月二十日ノ條ニ、紹運、筑後黑木ニ出陣スルコト、八月十九日ノ條ニ見ユ、

十三日、丙辰、筑前高祖ノ原田了榮、笠新兵衞ニ知行ヲ加フ、

〔兒玉韞採集文書〕二　○筑前

爲加恩五町地之事宛行訖、可被抽忠貞之狀如件、

天正十二年十月十三日　　了榮（原田）判

笠新兵衞殿

筑後猫尾ノ黑木實久、援ヲ島津忠平ニ求ム、是日、使者、肥後高瀨ニ到ル、

〔上井覺兼日記〕十九

一十三日、忠平樣典廐御宿へ御出被成、御座躰、客居武庫樣、忠棟、拙者、主居征久、本田紀伊守、奥之山左也、種々御會尺共被成、筑後之黑木（實久）より使者到來候趣、此度豊後衆取懸候處、數度防戰仕相支候へ共、肥前衆見次（實力）無閑之候間、不及力、豊州進退こ罷成候、○實久、大友義統ニ降ルコト、九月言、

天正十二年十月十三日

大友氏ノ兵坂東寺ニ陣ス

天正十二年十月十三日

一日ノ條ニ見ユ、然者豐衆坂東寺（筑後山門郡）ニ在陣候、龍造寺（政家）、秋月（種實）、筑紫（廣門）なと御一致候ハヽ、豐州衆一人も退候する儀ハ成かたく存候、忿々御入數三千程、黑木へ被指通、豐衆可討果御才覺、此節たるへき由也、就夫武庫樣於御宿、各御談合也、先黑木へ見切ニ輕衆二三人も被指越候て、其見償次第、軍衆可被指通御談合出合候て、黑木之使者高山方ニ相尋被成候、尤通路ハ輙可罷通候へとも、爰元之人數同心申候由、豐州承候てハ、後日爲ニ成間敷候、それも善惡此度一途御行候ハヽ、不苦候へ共、未定之儀候條、雖一兩人同心ハ罷成ましき由也、さてハ先々あいしらい候て、御返事可然之由候て、大方之御返答被成候也、志岐兵部太（大）輔殿禮ニ被來候、鹿皮十枚被持せ候、城殿內衆平川殿禮ニ被來候、酒肴持せられ候也、

○實久、大友義統ニ降ルコト、九月一日ノ條ニ、忠平、肥後高瀨ニ陣スルコト、九月二十四日ノ條ニ見ユ、

十四日、丁巳、伊勢大神宮領伊勢ノ地五百石ヲ祭主藤波慶忠ニ附與シ給フ、

是日、兩宮神主等、其還付ヲ禁裏ニ陳訴ス、

〔司家之舊記〕三 ○神宮文庫所藏

一皇太神宮神主

注進被經次第上奏、可令奉達叡聞之旨、兩太神宮領中、祭主謀訴、神宮悲歎申分子細專要之

織田信雄ノ替地伊勢ニテ二千五百石ノ內

間事

右神領就于祭主訴訟、於神宮領中可被引分所在之綸旨、同官狀、十月六日、被宮司告知訖、抑神領勢州南北之分、以南方郡內羽林信雄（織田）替地貳千五百石分兩宮相定了矣、其以後自祭主被致重訴、於神宮領中五百石分可有收納之由、神宮各驚存知、去春致注進之處、先以一旦可令遠慮之趣、御官家中被仰下、然者宮司可被曖沙汰之折節、祭主訴訟分、神宮可去渡之御下知、悲歎不過之、何以神役祭事可勤仕之乎、仰願神慮所至被聞召分、神領（如脫カ）本附致宮務、奉遂神事禮奠者、彌（脫アラン）聖運長久、國家泰平御祈禱之旨、仍注進言上如件、以解、

天正十貳年十月十四日　　大內人正六位上荒木田弘忠上

彌宜從四位上荒木田神主守豐、ーー四位下ーー守通、ーー守是、ーー守基、ーー正五位下氏晴、ーー經逸、ーー從五位上ーー經家、ーー守貞、ーー守生、ーー守在、

一豐受皇太神宮神主

注進經次第上奏、可被達于叡聞、兩太神宮領中、祭主謀訴、神宮悲歎申分子細間之事

右神領就于祭主訴訟、於神宮領中可被引分所在之綸旨、九月二十六日之綸旨、同官狀、十月七日、宮司告知、具承之者也、抑彼神領於北伊勢雖令受納、羽林信雄知行被改易之時、以南方郡

天正十二年十月十四日

内替之地貳千五百石分兩宮相定了矣、其以後自祭主被爲重訴、於神宮領中五百石分可有收藏之由、神宮各驚存知、去春申分之處、先以一旦可令遠慮之趣、御官家中被仰下、然者宮司可嘱申沙汰之折節、祭主訴詔分、神宮可去渡之御下知、悲歎不過之、何以日々御神供、月々御諸祭事可勤仕之乎、仰願神慮之所至被聞召分、神領如本附致收納、奉致神事禮奠、聖朝長久、國郡泰平可爲御祈禱之旨注進(脱アラン)、以解、

天正十二年十月日　　正六位上度會久能上

禰宜從三位――貴彦、禰宜從四位上――匡彦、――完彦、――從下――朝直、――貞佳、――貞副、――辰彦、――正五位下堯彦、――貞行、――常晴、

一太神宮司解申進請文

言上抑兩太神宮領祭主知行分間之裏

副進

二通　二宮禰宜等申文

右御綸旨、九月廿六日同官狀、十月七日到來、則致告知于兩宮、御請二通令進上畢、然間去春從兩宮以連署雖致注進、一旦可令遠慮之由、御官家中被仰下、其後奉遂重訴之處、某勵一嘱之申沙汰相抱申折節、御下知之趣、兩宮禰宜等致驚怖、御神供、諸祭事可及退轉之條、願祭主神宮一和之旨、於泰蒙聖斷者、天下泰平御祈禱(脱アルカ)矣、仍相副言上(脱アラン)如件、以解、

天正十二年十月十五日　　權主典　主典

大司大中臣朝臣滿長(花押)

權大司

少司

羽柴秀吉、大坂城中ニ茶湯ヲ催ス、

「今井宗久茶湯書拔」下　○靜嘉堂文庫所藏　天正十二年十月十四日晩、山里おゐて秀吉樣御茶湯次第

御かさり

一臺子の上ニ紹鷗茄子　大覺寺天目　數の臺

一同下ニ紹鷗釜　インセツノエンヲケ　クルミクチ合

一メンハク　御肩衝　四十石ノ御壺、召御茶也、　御茶碗　井上茶碗二ツの内順慶(マヽ)ノ

一御床ニ定家のシキシ　筒ニ菊御入候、

筒井順慶所持ノ井上茶碗

天正十二年十月十四日

一茄子の御茶入、宗易御立候、御座敷四人、宗易、幽齋、宗二(山上)、又其次安津、休夢(小寺)三人ッ、被下候、右明日之御會を秀吉様(信長)ニ被仰付候也、御人數三十二人、

同十五日朝

一御釜　セメヒボ

イモ頭の水指

御肩衝初花

尼子天目

タコツホノ水下

一御花入は紹鷗ッチ　花ハ石竹

一御茶ハ淨珊壺、極上也、

一番衆ハ宗易、幽齋、安津、宗及、二番衆、宮内法印(松井友閑)、宗玖(今井)、宗二、紹安、其外前のごとく、以上、

信濃諏訪頼忠、平井出清右衛門ニ、同國蔦木内五貫文ノ地ヲ宛行フ、

〔平出文書〕○信濃

定

蔦木(諏訪郡)内合五貫文出置候、無違儀致所務、可抽奉公者也、仍如件、

天正拾貳年

十月十四日

平井豆清右衛門殿

頼忠(諏訪)　朱印(印文頼忠)

○徳川家康、清右衛門尉ヲシテ、本領ヲ安堵セシムルコト、十年九月二十三日ノ條ニ見ユ、

前田利家、佐々成政ノ屬城加賀鳥越附近ヲ火ク、

〔加越登記〕末森城後詰事

一同年(天正十二年)十月十四日に利家公鳥越近邊へ御馬を被出、民屋燒拂被成候事被仰候ハ、此城をせめ落すへきとおもふか、其方共如何被存候哉と御尋被成候、不破、村井(長頼)、多那村(三郎四郎)被申上候ハ、尤せめ落し候ハん事ハ案の内に而候へ共、城中こも二千計入置被申候由承間、左候ハヽ、一万騎三分一ト損し可申候、成政(佐々)富山の城に一万騎の勢にて居城候事候、大事を御かゝ候て、是ほとの小城に人數を御ついやし被成候はん事、能には無御座候と、各被申上候得は、尤と被仰候か、又御意候ハ、何とそして、城中より足長に呼出し、付入に可被成と有て、足輕を懸ヶ色々手引被成候へ共、城主久瀨但馬守、武邊功名故少も搆不申候故、近邊御燒拂被成候を、勝に被成歸陣被成候、其後ハ北國の習ひ雪ふり候故、互に其年中ハ御弓

城主久瀨但馬守出撃セズ

天正十二年十月十四日

矢御納被成候、○末森記、末守軍記、加越戰爭記殆ド同ジ、

〔前田創業記〕量　○上略、末森合戰ノコトニカ、ル、九月十一日ノ條ニ收ム、十月十四日、公發（前田利家）金澤出陣于越中、進到鳥越邊放火於人屋、進兵於城下、雖排（挑カ）戰、城主久瀨但馬逆覩吾軍不可利、而堅守不妄出兵、因公班軍、

○下略、金澤前田家譜異事ナシ、

○成政、鳥越ヲ奪フコト、九月十一日ノ條ニ利家、再ビ鳥越ヲ攻ムルコト、十三年四月八日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔越登加三州志〕十　鍵鑿餘考十　國祖燒鳥越城下

十四日、公尾山ヲ發旗シ、鳥越城ヲ巡察、城下ニ火ヲ放タシムレトモ、城守久世但馬等出ス、故ニ城下ノ人家ヲ盡トク燔炳セシメテ尾山ヘ班軍也、世本ニハ、公尾山ヲ出馬、森下、栗崎ニ陣シ、鳥越ヲ攻ンヿヲ議スルノ處、村井、不破、公ニ謂テ、成政トノ要戰未タ遂サルニ、此小堡ニ兵力ヲ費シ玉ハンヿ不可ト諫ルニ因テ、鳥越城ヲ攻ルヿヲ止メ、城下ノ人家ヲ焚テ、公尾山ヘ歸城トアリ、景周按ルニ、此說前月十二日、公末森ヨリノ歸路ニテ目賀田等鳥越ヲ亡ケ、成政ニ此城ヲ取ラルヽヲ憤ラセ、一舉ニ屠ラントアルヲ、村井、不破諫テ村井、不破又前言ノ如ク諫メテ、公其言ニ從フヿ不審也、諫テ止ナラハ發旗セサル前ニ在ヘシ、此所ヲ考ルニ、此度村井、不破諫メテ公止ト云ハ、前月十二日歸路ノ節ノ言ト混雜ノ書誤タル成ヘシ、又鳥越ヲ攻ルニ、森下、栗崎ニ陣スルヿ程遠シ、津幡城ハ鳥越トハ三十三町其間アリテヨキ向城也、然ルニ津幡ニ至ラス、森下、栗崎ニ陣シテ、議シ玉フト云不審也、其上森下ヨリ栗崎マテノ下營モ其程遠キ者也、且自國野陣モ不審也、它日精選ノ記ヲ得テ正スヘシ、同志ノ者忽カセニスヘカラス、

羽柴次秀勝ノ老臣田中吉政、舊ニ依リ、丹波天寧寺ノ諸式ヲ免許シ、且竹木ノ伐採ヲ禁ズ、

〔天寧寺文書〕○丹波　當寺之事任往古之旨、諸式令免許訖、仍陣取幷竹木等剪捕之事堅令停止之狀如件、

田中久兵衞尉
吉政（花押）

十月十四日

天寧寺

○明智秀滿、同寺ノ諸式ヲ免許スルコト、九年十月六日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔天寧寺文書〕○丹波　御領主曆代系圖記牧常右衞門所持之寫、

丹波天田郡曾我庄福知山曆代御城主記○中略

太閤時代　田中久兵衞　吉政

天正十二年甲申年より、羽柴秀吉の代官として、奥丹波の政道を執る、

十五日、戊午、御日待、

〔兼見卿記〕七　十月十五日、戊午、禁裏御日待、各祗候之由勸（勸修寺晴豐）亞相被申了、

毛利輝元、出雲國造北島久孝ニ同國曾我宮造營ノ費トシテ、一分ノ德政ヲ

天正十二年十月十五日

寄進ス、

〔北島文書〕三〇出雲

（封紙ウハ書）（異筆）天正十二素峨社建立狀

「　　」

國造北嶋（久孝）殿御宿所　　右馬頭

輝元」

曾峨宮建立之儀、以御取替被相調、祝著之至候、就其御一分之德政事進之置候、先法度之旨不可有相違候、於趣者從（國司右京亮元武）右所可申候、恐々謹言、

天正拾貳　十月十五日　　輝元（毛利）（花押）

國造北嶋殿御宿所

（毛利輝元）（花押）

曾我宮御造榮（營）御遷宮之儀、以御取替被相調候、就夫御一分之德政被進置之候法度之事、

一質物藏返之事

一年記永代賣幷一作返之事

久孝建立ノ費用ヲ取替フ

質物藏返年期永代賣一作返

一堅被載神文借狀雖在之、相立間敷事、

右之條者、此以前千家（義廣）殿江被遣候可爲御法度之由候、若有背此旨輩者、被遂御注進、彌可被加下知候、此由可申入之旨候、恐々謹言、

天正拾貳　十月十五日　　國司右京亮　元武（花押）

粟屋掃部助　元眞（花押）

兒玉三郎右衛門尉　元良（花押）

粟屋右京亮　元勝（花押）

桂左衛門大夫　就宣（花押）

神文ヲ載スル借狀モ棄破

國造北嶋殿

○輝元及ビ吉川元春、出雲神魂社ヲ造營スルコト、十一年十二月二十二日ノ條ニ見ユ、

天正十二年十月十五日

北嶋氏無力ニ依リ德政ヲ與フ
國造千家氏ノ非法ヲ訴フ
北嶋氏毛利氏ニ

〔參考〕

〔千家文書〕十一　○出雲

態貴札致拜見候、仍北嶋殿當時御無力被相極付而、御手前至家來德政被進置候、然處ニ御領分ゟ北嶋殿幷撿使之者共計を入申候哉、既ニ元就(毛利)、降元(毛利)證判云、先年被成御下向、彌被仰縮重疊證判被仰請之內、如此之段御迷惑之由、先以無承儀存候、此等之躰之儀御社法可有之候歟、勿論先年御手前へ德政被進之候時之例も、可有御座候條、如寂前被仰談可然存候、乍去定而於其元不可相澄候條、兒小次(兒玉元愛)申談相伺之處ニ、所詮御兩家共ニ御雜掌壹人宛帶先證被差出候者、以其上、双方被相究、落著之趣可被申入候、從北嶋殿も、右之旨趣被仰越候間、御同前ニ申入候、撿使之者共ニも、此之由申遣候、落著之間、自兩方不被手入、可有御堪忍事肝要ニ存候、先年御下向之時、御取合申段、無忘脚(却)候、其砌之證判被差下、可被仰明候、於我等不可有疎意候、菟角有道之取沙汰不可有其緩候、於時儀者、切々被仰越、又可得貴意候、恐惶謹言、

元武(花押)

霜月廿一日(年次未詳)　　國司右京亮

(切封ウハ書)「〻〻」　　元武」

國造千家殿人々御中貴報

十六日、己未、羽筑秀吉、淺野長吉ニ命ジ、播磨飾磨津ニ於テ、兵粮二百石ヲ十河存保ノ將篠原甚五、森志摩守ニ渡サシム、

甚五等阿波ニ在リ

〔中村市右衛門氏所藏文書〕○近江

八木貳百石、あわとさとまりし(土佐泊)の原(篠)甚五、もりしま(森志摩守)のかみかたへ、はりまし(飾磨津)かまつにて可相渡者也、

天正十貳　　秀吉(花押)

十月十六日

彌(淺野長吉)ひやうへ

蒲生賦秀(氏郷)、儀俄忠兵衛尉ニ伊勢飯野、飯高二郡ノ內八百貫ノ地ヲ、西村重就ニ同國飯高、一志二郡ノ內二百貫ノ地ヲ宛行フ、

〔蒲生文書〕二　○出雲

爲支配於飯野、飯高郡內八百貫進之候、目錄別帋在之、可有全領知候、仍如件、

天正拾貳　　飛驒守

拾月十六日　　賦秀(花押)

儀俄忠兵衛尉殿

〔杜本志賀文書〕志賀文書　○色川本

内堀二郎助ニモ四百貫文ノ地ヲ與フ

爲支配飯高、一志兩郡之内於山室、次叶内二百貫宛行訖、可全領知、仍狀如件、
天正貳十月十六日　賦秀（花押）
西村左馬殿（重勝）

又内堀二郎助文書三右衛門重京家ニ傳來候、二郎助後更伊與、

一天正十二十月十六日、蒲生賦秀公ゟ内堀二郎助へ四百貫文之所給了、一通、

○賦秀、近江日野ヨリ伊勢松島ニ徙ルコト、六月十三日ノ條ニ、重就ニ近江神崎郡ノ地ヲ給スルコト、十一年八月二十二日ノ條ニ見ユ、

徳川家康、酒井忠次ヲシテ、尾張清洲ヲ、榊原康政ヲシテ、小牧ヲ、菅沼定盈ヲシテ、松平家忠ト共ニ小幡ヲ守ラシム、尋デ、家康、遠江濱松ニ還ル、

〔家忠日記〕三　十月、

十三日、乙卯（丙）、
十四日、丙辰（丁）、
十五日、丁巳（戊）、
十六日、戊午（己）、酒左へ（酒井忠次）清須へうつられ候、小牧榊（榊原康政）小平太、小幡菅沼織部（定盈）殿と兩人うつり候、

十七日、己未（庚）、家康御馬ヲ被入候、
十八日、庚申（辛）、
十九日、辛酉（壬）、雨降、

〔當代記〕三　十月十六日、家康遠州ヱ歸陣給、

〔寛永諸家系圖傳〕十四　榊原康政小平太、式部太輔（大）、大權現いくさを引てかへりたまふ時、康政一人に命して小牧を守らしめて、上方のおさへとしたまふ、康政あらたに城をかまへて防戰のそなへをなす、○上下略

〔寛政重修諸家譜〕百　榊原康政童名龜、小平太、式部大輔、十月（天正十二年）、軍を岡崎城（濱松）にかへさるゝのとき、小牧城には康政をとゝめ置れんとおほしめさるゝのむね仰下さるゝにより、老臣等とこれをはかるのところ、太閤ほとの大敵を引請、城を枕として討死せんこそ、末代までの譽なれと申せしかは、すなはちそのむねを言上に及ふのところ、康政にはよき家臣數多あれは、かく潔き御請を申せしよし御感悅あり、康政これより小牧にとゝまり、上方の押となりて防戰の備をなす、○上下略

〔菅沼家譜〕三百三　菅沼定盈竹千代、新八郎、織部正、十月十六日（天正十二年）より、小幡城を守衛し、○上下略

天正十二年十月十六日

一同年(天正十二)十月十六日、酒井忠次自小牧至清須在番、小牧ハ榊原小平太勤番、小幡ハ定盈勤番也、

〔寛政重修諸家譜〕二十九　松平家忠(又八郎、主殿助、)十月十一日(天正十二年)、太閤伊勢國に軍を出すよし聞えけれハ、小牧山の要害を巡見し給ひ、家忠をめし、小幡城をまもるへしとて菅沼定盈を副らる、(上略)

康政家臣ヲ誡ム

○家康、小牧ヲ巡視シ、家忠ヲシテ小幡ヲ守ラシムルコト、本月十一日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔柏崎物語〕中　一信雄は伊勢に被居、神君は清洲より小牧江御出、左衞門尉に清洲を守り候様被仰付、小牧をは小平太守り可申と被願、尤なり、其方人數少し、迷惑成事を申付るも無益なり、其方家來ともと相談仕候様上意ニ付、宿へ歸り、家來を呼出し、小牧を守り候義其方とも迷惑と存候てハ不相成候と被申、詞不終内、是は如何の御事に候、いか様ニも御受可被成候事也、小牧は尾州の内故、御見立なれともまはら也、秀吉數萬の人數にて被責候ハヽ、少勢にて引受、心能討死可仕と、何れも申に付、康政悦ひ被申、心よく御受可申上とて、右の趣有體に言上被致候、神君甚御悦、無双の勇士を預け置、左様ニ而可有、早々守り候様可仕と上意也、且小幡砦御修覆被仰付、松平主殿、菅沼新八を被差置、同十七日、岡崎(濱松下同シ)へ御馬を被入、三月、御出馬にて、十月十七日、岡崎へ御馬を被入候なり、其内小平太

小牧ノ板塀ニ白土ヲ塗ル

小牧ハ用水乏シク湟塹粗略ナリ

小牧砦外板塀にて有しを岡崎より白土を取寄塗候ニ付、白塀と見へ、上方勢いよ〳〵恐れ候由、或日、秀吉より大物見を出、廻合有、榊原の手より馬を取來る事あり、秀吉被申は、天下の勇勢を引請、あの小勢にておれと取合は、天晴不敵の者なり、德川家には勇士有と、殊の外感し被申候、

〔武德編年集成〕三十　十六日(十月)、鈞命ニ依テ、酒井左衞門尉清洲城ヲ守ル、且榊原小平太康政ヲ以テ小牧山ノ砦ヲ守ルベキ由命ゼラル、抑此舊壘元ヨリ用水乏シク、湟塹粗略タル故、最初ニ命ヲ蒙ル部將有シカトモ、聊難澁ス、是ニ依テ康政ヲ召テ、從軍等ト相議シ、此砦ヲ守ルベキ旨御諚有、則康政老臣隊長等ヲ集メ、尋問フ所、最モ要害疎ニメ、修築モ亦全カラズ、秀吉ノ猛勢ヲ引受ベキ城郭ニハ非ザレトモ、何地ニ於テ成トモ、生命ヲ君ニ獻ゼンコト庶幾スル所也、秀吉程ノ英雄、彼猛卒ヲ引受テ死ヲ遂ンハ、殊ニ大丈夫ノ本意タル由異口同音ニ述ケレバ、康政大ニ感嘆ノ、神君ヘ言上ニ及ブ所、神君、汝ニハ無雙ノ勇士ヲ附屬セシ故、最初ヨリ斯ノ如ク領掌スベシト察スル所也、早ク用意スベキ旨宣フ、小幡ノ砦ハ小牧ヨリ參州ヘノ要路タル故、松平主殿助、菅沼新八郎定盈ヲ入置カル、各今日ヨリ彼砦ニ在衞ス、十七日、神君岡崎(濱松)ヘ御凱旋、兵馬ヲ休玉フ、榊原康政小牧山ヲ守リケルガ、岡崎近邊ニ白キ土有ヲ取寄、半切桶ト云物ヲ支度シ、右ノ土ヲ水ニテ和ゲ、悉ク壁ニ引ケレバ、酒油ヲ以テ制ス

秀吉奈良河田大野邊ニ砦ヲ構ヲ

ル程ニハ非ザレトモ、忽櫓塀一夜ニ白壁ト成ヌ、秀吉大斥候ノ内ニ雑リ、進デ是ヲ監臨シ、斯ノ如要害ヨカラザル小壘ニ籠テ天下ノ猛勢ヲ引受ントスル不敵者、徳川家ニ有ヤト甚歎息シ、是ヨリ尚和睦ノ企發起スト云々、

〔長久手戰話〕坤　秀吉羽黑邊燒働、三井重吉陣、公從清須移岩倉、秀吉引兵、信雄歸長嶋、公歸御岡崎

（天正十二年）八月中旬、秀吉出陣し、濃劔を經て上郡邊へ來り、先勢は羽黑邊まて來り、近郷燒働、府上、奈良、河田、大野邊陣砦を搆へ、三井、季吉（重）陣せらる、神君此由御聞有て、清須より御出馬、岩倉に御陣被備○家康、岩倉ニ出ルコト、八月二十八日ノ條ニ見ユ、秀吉の跡を押留被成、信雄は自是長嶋へ歸城、定而秀吉勢州へ可被出哉と也、是神君思召ニ依て也、神君一先爲御休息岡崎へ御歸城、清須ニ酒井左衞門御殘置、小牧ニ榊原小平太、小幡ニ菅沼新八郎御殘し置、三劔へのつなきに被成候也、

被官ノ驅落セルヲ者ハ召返サシム

徳川家康、西郷家員ヲシテ、尾張赤見ヲ守ラシム、是日、家康、之ニ扶持方毎月五百人分ヲ與フ、

〔古文書〕（西郷）○記錄御用所本　台德院殿西郷彈正左衞門尉家員拜領

（丹羽郡）赤見在城之事

右扶持方五百人之通、毎月無相違可相渡候、以此旨人數相當程可被相抱候、諸（被カ）披官令闕（落カ）荷雖有何方、不及異儀可被召返候也、仍如件、

天正十二年
十月十六日
西郷孫九郎殿　御朱印

織田信雄ニ對シ忠節ヲ抽デンコトヲ要ム

〔寛政重修諸家譜〕三百六十九　西郷家員初員好、新太郎、孫九郎、彈正左衞門、實は清員か長男、十二年十月、豐臣太閤尾張國に發向のとき、仰によりて赤見の砦を守る、十六日、從兵を增の料として月俸五百口を賜ひ、御朱印を下さる、○上下略

（天正）

徳川家康、佐々成政ニ答ヘ、成政身上ノ儀ニ就キテ疎意ナキ旨ヲ述ブ、

〔譜牒餘錄〕六　松平加賀守家臣　權現樣御判物

佐々木陸奥守（成政）被申越之趣委細得其意候、此上彌被盡戰功、奉對信雄於被抽忠節者、年來別而申談之上者、御身上之儀涯分無疎意可引立申、於時宜者可御心易候、猶期後音之時候、恐々謹言、

（天正十二年）十月十六日　不破彦三殿

不破彦三

御諱　御判

○成政、前田利家ノ屬城能登末森ヲ圍ムコト、九月十一日ノ條ニ、越中富山ヲ發シ、遠江

濱松ニ抵リテ、德川家康ヲ訪フコト、十二月二十五日ノ條ニ見ユ、

十七日、庚申、羽柴秀吉、禁裏御料所山城十一箇郷ニ於ケル諸職、人夫等ノ競望ヲ止ム、

〔妙行寺文書〕○尾張

禁裏樣御料所分十一ヶ郷之內事、增米四百石外、爲一職上者、諸職、人夫等一切不可有他競望之狀、如件、

增米四百石ノ外ハ一職ノ地

天正十貳　　秀吉（花押）

十月十七日

勸修寺殿（晴豐）

廣橋殿（兼勝）

休庵（久我通興）

勸修寺晴豐

廣橋兼勝

久我通興

○京都ノ奉行前田玄以、藪田新丞ヲシテ、禁裏御料所山城吉祥院北條莊屋及ビ定使職ヲ安堵セシムルコト、三月十五日ノ條ニ見ユ、

丹波龜山ノ羽柴次、秀勝、內侍所ニ御神樂ヲ奏ス、

〔兼見卿記〕七　九月九日、壬午、早旦社參、兩社神事如常、

次龜山ニ殿舍ヲ營ム

歸宅、祝義御方之衆各相伴、自御方二荷兩種持來、自龜山御次南方ニ殿ヲ立ラル也、當年指合之方之由申、祈念之儀、去六日彼御母義承了、御返事云、南方當年大塞金神也、罷下於新御殿可致祈念占之由申遣之處、御次ヘ此義隱申サル、ノ間、於此方令祈念、鎭札可調下之由重而申來、今日相調之、屋固札、一、金神札、一、外題、金、

天度三百座、一尺二寸、四手四サカリ、名々以此祓中臣祓可誦之也、○下略、吉田淨勝、殺スルコトニカ、ル、九月五日ノ條ニ收ム、

十日、癸未、自御次祈念行事、三座鎭札三相調之、○下略

十三日、丙戌、丹州龜山御次御祓、鷄之大緒一筋、御袋ヘ御祓、白粉、五箱、ちヤ〳〵ヘ白粉、三、藤懸淸右衞門ヘ帶一筋付テ遣之、

藤懸淸右衞門

先度之鎭札三、金神、大塞、屋固、箱別ニ入遣之、入夜罷上御祓札、御祝著御返事在之、靑銅參百疋到來、

出御ナシ

十月十七日、庚申、今夜有御神樂之義、無出御之義云々、此儀龜山御次爲祈禱申入云々、

〔言經卿記〕五　十月、

十七日、庚申、天晴、

一內侍所御神樂有之、追而可記之、

〔公卿補任〕五十　十月十七日、內侍所御神樂三ヶ夜有之、織田次行之、

〔續史愚抄〕五十　十月十七日、庚申、被行内侍所臨時御神樂、次被付行恒例歟、（言經卿記、公卿補任、秘抄、）

○次、尾張ニ病ミ、吉田兼和、祓ヲ送ルコト、五月十六日ノ條ニ、羽柴秀吉、竹田定加ヲシテ次ノ病ヲ診療セシムルコト、九月二十五日ノ條ニ見ユ、

梅若大夫、勸進能ヲ上御靈社旅所ニ張ル、

〔言經卿記〕五　十月、

三條町ノ伊藤與二郎

十七日、庚申、天晴、

一安禪寺殿ヨリ北向、阿茶丸等朝飡召之間、則參了、後刻朝飡已後ニ可參之由御使有之間參了、安禪寺殿ヘ三條町伊藤與二郎來、御樽、食籠、綿等持參申、則御對面、予御倍膳（陪）候了、次上御靈旅所ニテ勸進能（大夫梅若）、御見物ニ、安禪寺御忍渡御、予、北向、阿茶丸等、其外各御申（供カ）、今日能、道成寺、笋、三輪、空腹（ヒモジ）、錦木、老松（キリ）等也、及暮ヒ了、次安禪寺ヘ可參之由、兩三人參了、庚申待也、夕飡御相伴了、子刻ニ歸宅了、

庚申待

伊豫高峠ノ石川通清歿ス、子虎竹丸嗣グ、

〔澄水記〕○土佐　一其已後（○石川伊豫守、家臣石川源太夫ヲ誅スルコトヲ指ス、）天文元年壬辰に當て、伊與守の内室產前の祈願として、直言院へ使者を立らる、此時眞言院は古德營構の靈地として、寶堂雲（勸請）をさしはさみ佛閣いらかをならへたり、則本堂に壇をかさり、一千座の藥師の法をこんしゆせり、誠に

通清ノ誕生

瑜珈清淨の浪清く醫王善逝の光り移りけるにや、當る月無難にして產の紐をときけるに、男子にて虎千代と名付、父母の寵愛淺からす、二郡（新居、宇摩）の地頭等登城して萬歲を祝しける、此時藥師の燈明料として山之下五拾畝の地を寄附せられけるなり、

幼名虎千代

一然る後に氏神伊曾（イソ）の宮へ社參有、爰に德永因幡守とて大町（新居郡）波尼間の搔上の城に居住しける、去共德永家ハ當社鎭座の始より神明もしろしめさるゝ家なれはとて、同社參しける、扨神官共神樂を奏し幣帛をさゝけて和光の月をかゝやかし、同塵の影（ホウ）をすゝしめける、此時窪田五拾畝の所を寄進せられける、扨又奧之内に東の館、西の館とて、石川の下屋鋪有、西の館ハ石川居住す、東の館ハ虎千代居住す、爰に、野津子の工藤とて堀をめくらし、水をためて居住す、東の館と程近し、工藤も若年なれハ、虎千代と常に竹馬春風（イ氣）をかたらいける、虎千代次第に成長して、器量世にこへ、十四歲になりける時、天文十四年二月末の廿五日、連歌の會始り、嘉例延年と定らるゝ、坐席ハ工藤か家也、既に預參（イ會）の日至りて、床に天神御影を掛て、儀式嚴重也、石川親子上坐に、連衆次第に竝居ける、執筆ハ讃岐越智之介也、發句虎千代

德永因幡守

虎千代ノ器量世ニ越ユ

發句

神松や千とせを經てもわか綠

鋪（敷）島の出會是始なれハ、遠慮も有、一句の風情も不闕、只志のうこきけるを其儘言出しけ

石川越前守

備中守通清ト名乘ル

三好長慶ノ女ヲ娶ル

高峠ニ移ル

る也、石川越前守言けるは、少年の作意にハ、是やさしくこそ覺ゆれとて、一卷終りぬ、此卷去ル所に今にあり、年月久布物なれは文字もさたかに見へす、疊帋(畳カ)に判者石川越前守也と手替りにて書付有、然は此時の歌巧者と見へたり、此越前守は外に記したるものなし、定而石川の家臣成へし、或人の言ハ福武(フクタケ)に山城の跡あり、爰に居住せしと言也、然るに此境内究て狹ふして、名有者の住へき所にあらす、去とも越前守此地相應の身上哉覽、扨又讃岐越智之介は石川の右筆にて、宿所ハ長安村に在ける、才覺有人やらん、今般執筆仕りぬ、天文二十一年にハ虎千代官途して備中守通清と名乘る、漁獵の遊覽有へしとて、西條の地頭等と共に、先ッ江淵の塩出若狹守か所に至り、小船數百艘用意して塩出の堀きわより棹さし出して、飛盞覽望して憂を消し、娛を極めける、是毎年の催しなりけり、其後弘治二年丙辰に、阿州三好(長慶)の女を備中守の室に迎(送カ)る、畑野の城主薦田四郎次郎出て向ひ、鍋の城ニて受取、是より高峠へ移しけるとかや、鍋の城に此時居住せし者の其名不知、今近邊の宿老に尋ぬれ共知れる者なし、此度の縁組ハ轆轤(トヾロキ)の城に居住しける大西道譽と云ものゝ才覺なりとそ聞へし、

一永祿元年戊午の年七月三日に萩生(ハギウ)村岸拂ひと言事始まれり、去ハ石川高峠へ移りて後、山林竹木を綺(イロフ)事を制禁す、是によりて松柏綠を重ねて雲に聳へ、檜杉の枝をましへて城を覆

通清ノ女金子元宅ニ嫁ス

通清禪法ニ心ヲ傾ク

戒名保國寺ニ葬ル

ひけり、西條の地頭等人足を出して四方の切岸にはへ繁りたる枝葉荆棘を刈のけれハ、城の景殊に勝れて見へけり、是毎年の課役なりとそ、

一同十二年に備中守か女を金子彦十郎に嫁入せしむ、其妹ハ高峠落城の後、川畑甚右衛門と言者の妻と成ける、扨此彦十郎ハ後金子備後(元宅)守と言し者なり、○一箇條省略、通清、長宗我部元親ニ人質ヲ送ルコトニカヽル、十一年正月十三日ノ條ニ收ム、

一天正十二年に、備中守違例甚布、醫術手を盡し、佛神に祈誓すれ共驗シなし、備中守平生禪法に心をかたむけ、直指人心を味へり、臨終の時至りて、硯を取寄、筆を備て辭世の頌をそ書ける、

本來一路　無海無山
雲水何物(シヲ)　虛空是閑(レ也)

天正十二年十月十七日と書付て、浮世のきつな(絆)をはなれて、身心怕然として終に空しく成ける、一類是を悲み萬民是を歎く、扨葬禮をつくろひて導師ハ保國寺玉翁禪(和尚)師也、改名ハ寶勝院殿日山宗輪大居士と法名し、死骸寺中に埋め、塔頭今にあり、然ハ保國寺ハ四神相應の大伽藍地也、前開山ハ佛道禪師と言傳へたり、前の八塔堂の山ハ虎のひさますくかことく、後ハ高峠の麓を究、南ハ峯高く、北ハ山海湛へたり、大河谷を廻りて右(ニカ)りより左りへ流

るゝ眺望無比の靈區なれハ、前伊豫守常に心を寄て、時々此禪院を訪ひ、上福三拾畝、下福五拾畝合八拾畝の所を永代の僧供にあてらるゝ、又此備中守ハ當寺の築山を營まれ、今に其跡有、去は人ハ一代にして卒せり、名ハ末代に遺りぬ、彼を見、是を聞に、只是如露、亦如電の、（ウヽ）有爲境界ういきやうかいこそはかなかりけれ、○中略、羽柴秀吉、弟秀長等ヲシテ、長宗我部元親ヲ伐タシムルコトニカヽル、備中守子息虎竹ハ當年八歳成けるか、虎竹幼少なれハ、去年備中守卒去の後ハ、近藤長門守後見と成ける、

〔豫州來由記〕○伊豫　天文元年、壬辰、今年石川（伊豫守）ノ嫡子誕生、虎千代トソ申ス、成長シテ石川備中守通清ト號ス、弘治二年ニ阿州ノ三好長慶ノ娘ヲ迎テ室トセリ、永祿十二年ニ備中守ノ娘、金子彦十郎ニ嫁セシム、其妹ハ高峠落城ノ後ニ細川甚右衛門ト云者ノ妻トナリ、男子虎竹丸、高峠落城ノ時ニ八歳也、天正十二年十月十七日、備中守通清卒ス、

辭世ノ頌ニ曰、

本來一路　無海無山　雲水何物　虛空是閑

導師ハ保國寺玉翁和尚

法名寶勝院殿月山宗輪大居士

○通清、歿スルコト、年月未ダ詳ナラズ、姑ク澄水記、豫州來由記ニ據リテ玆ニ掲グ、ナホ通清、長宗我部元親ニ質ヲ致スコト、十一年正月十三日ノ條ニ見ユ、

家康和田光明ヲシテ數正ノ指揮ニ從ハシム

十八日、辛酉、德川家康ノ將石川數正、東美濃ニ出デ、羽柴秀吉ノ兵ト戰フ、是日、家康、遠山佐渡守ニ書ヲ與ヘテ、其子半左衛門尉ノ戰死ヲ傷ム、

〔譜牒餘錄〕四十松平丹波守　和田五郎右衛門先祖小里助右衛門御感狀御證文拜領之覺書

一同年（天正十二年）爲東美濃御退治、石川伯耆守殿被遣之時光明（和田）をも被指副、其時又戰功あるに依て、御感狀頂戴仕候寫、

於其表今度被盡粉骨之由察入候、其元之樣子石川伯耆守任差圖可被入精事肝要候、恐々謹言、

十月十八日　權現樣

和田助右衛門尉殿　御名乘御書判

〔寛政重修諸家譜〕千二百六十五　小里光明助右衛門、（天正十二年）このとし、石川伯耆守數正をして、美濃國をうたしめたまふのとき光明をも數正に副らる、十月十八日、光明その地にをいて粉骨を盡せし狀をしはからせたまふ、猶數正か指揮にまかせ精いるへしとの御書をたまふ、○上下略

〔上原準一氏所藏文書〕○讃岐

今度於其表晝夜之辛勞令察候、仍半左衛門尉討死之儀無是非儀候、御心底押計候、乍去次男（茂兵衛）

在之由候條、彌忠儀專一候、尙井伊兵部(直政)太輔可申候、恐々謹言、

(天正十二年ト同ジ)十月十八日　家康(花押)

遠山佐渡守殿

家康濱松ニ歸ラントス

返々半左衞門尉殿之儀不及是非事とハ申なから、御せうしにて候、御書を被遣候ハんか、明日御馬を被納候間、○家康、遠江濱松ニ歸ルコト本月十六日ノ條ニ見ユ、御取紛之時分ニ候條、我々より申越候、なさま(ニ脫カ)遠州より重而可申入候、其元御存分之由、先以目出度候、以上、

其表之樣子急度御注進、則披露申候、仍半左衞門尉殿打死之由驚入候、御勝(笑止カ)事千万ニ候、殿樣一段御をしみ被成候、其方ゟ被仰越樣一段神妙成儀ニ候由ニて候、是以御かんし被成候事半左衞門尉殿之儀中々不及申候、乍去定事候間、不是非(及脫カ)候、御弟子候之上者、少も御無沙汰被成間敷之由被仰出候、返々右旨我々方ゟ相心得可申入候之由候、恐々謹言、

十月十七日　直政(花押)

「　〃　」　□□□□(井兵部大)

遠山佐渡守殿御返報　直政

〔譜牒餘錄〕四　松平讃岐守家臣遠山伊兵衞　遠山伊兵衞由緒之覺

半左衞門ノ子平兵衞正ニ生駒親仕フ

弟茂兵衞ハ宇喜多秀家ニ仕ヘ後山内忠義ニ尋デ松平定行ニ仕フ

一遠山佐渡守子半左衞門、是ハ東美濃之内領知仕候、半左衞門討死以後、追付佐渡守も致病死候、其節次男茂兵衞幷半左衞門子平兵衞も幼少付而跡目立不申候、其後平兵衞儀由緒有之、生駒雅(親正)樂頭殿へ罷越候、生駒讃(一正)岐守殿、同壹(高俊)岐守殿代迄罷在、其後浪人仕、致病死候、茂兵衞儀者、其後備前中納言(宇喜多秀家)殿罷出、中納言殿配所ゟ御越已後、土州松平(山内忠義)土佐守殿へ罷出、彼地致浪人、豫州松平隱岐(定行)守殿ゟ罷出、致病死候、其子孫致相續、于今豫州罷在候、以上、

平兵衞子遠山伊兵衞

秀吉東美濃ニ出テントイフ

〔伊豫小松一柳文書〕○伊豫

急度申遣候、東美濃ニ調越候子細候條、明日我々出馬候、成其意、早々可被立候、爲其畠田計右衞門、牧村長兵衞(政吉)差越候條、無油斷可相立候者也、

十月十九日　秀吉御伴(判)

一柳市助(宋安)殿

〔近江水口加藤家文書〕一○近江

東美濃高山表越節所敵取出候由候間、幸事候條、可討果与(蔑カ)運至于坂本出馬候へ共、悉引取候由候間、不及是非候、○下略、十月廿二日附加藤孫六宛秀吉書狀、全文ハ本月二十三日ノ條ニ收ム、

〔溝江文書〕

天正十二年十月十八日

天正十二年十月十八日

家康ノ兵東美濃ヨリ退ク

廿五日書狀、今日至勢州濱田表到來、令披見候、仍東美濃國端へ敵五六千罷出候由、注進候條、越節所人數候間、幸与存、十九日申刻ニ承、繼夜日一騎懸候之處、早人數之催を聞候哉、敗軍同前ニ引入候間、不及是非、〇下略、十月廿八日附秀吉書狀、全文ハ本月二十八日ノ條ニ收ム、ナホ本文書宛名ヲ闕クト雖モ、歷代古案ニハ宛所ヲ惟住越前守ニツクル、

〇遠山半左衞門尉等、美濃明知ヲ攻ムルコト、三月二十三日ノ條ニ、同國岩村ヲ攻ムルコト、四月八日ノ條ニ、金森長近、飛驒ニ出馬セントシテ、石徹白長澄ニ書ヲ遣リ、同國ノ情勢ヲ報ゼシムルコト、九月二十三日ノ條ニ、秀吉、大坂ヲ發シ、近江坂本ニ赴クコト、本月二十日ノ條ニ、北伊勢ニ出ルコト、同月二十三日ノ條ニ、德川家康、尾張淸洲ニ出ルコト、十一月九日ノ條ニ見ユ、

上杉景勝、林源五郎ノ功ヲ賞シテ地ヲ與フ、

〔上杉年譜〕二十九 景勝九

御錯亂以來〇天正六年、景勝、景虎ト爭フコトヲ指ス、神妙依御奉公申上、多功分之內廣地幷長松村申成出之候、軍役等之儀嚴重相勤可申者也、仍如件、

天正十二年
御朱印
十月十八日
林源五郎殿

泉澤河內守(久秀)奉之

泉澤久秀

十九日、壬戌、長宗我部元親ノ兵、西園寺公廣ノ居城伊豫黑瀨ヲ陷ル、是日、毛利輝元ノ將桂元親、之ヲ輝元ニ報ズ、

〔萩藩閥閱錄〕四十七 南方九左衞門

南方就正伊豫ノ事ヲ急グベシ

南宮(南方就正)被申分之儀、令承知候、旣判形遣之たる儀候條、不可有餘儀候、此趣申渡之、與州へ之儀可指急事肝要候、謹言、

天正十貳年
十月五日
內藤元榮(內藤元榮)
內與三右

輝元御判

〔毛利氏四代實錄考證論斷〕二十五 福井十郎兵衞譜

與州渡海之衆へ遣方之儀付而、此者差遣候條、何篇可相談事肝要候、〳〵、謹言、

十月廿三日
福井就信(福井就信)
福十兵

輝元御判

輝元

〔桂文書〕〇池田與一氏所藏

其表之儀、此節心遣肝心候、玉藥差遣候、何篇於趣者申越、可得其心候、謹言、

十月廿四日
輝元(花押)

天正十二年十月十九日

警固船

黑瀨落去南方就正等廿八日渡海スベシ

天正十二年十月十九日

桂兵（元親）

〔萩藩閥閲錄〕百三十五 高井小左衞門

粟屋彌（元喜）八一所之者、其方同道こて、與州罷渡候、高井藤（盛臣）右衞門尉事、神惣相そへ候て、下へ可差遣候條、警固一艘令馳走、可罷出之由、可申聞候、來晦日、一日之頃たるへく候、不可有緩候、謹言、

十月廿五日　　てる元 御判

粟右

〔桂文書〕○池田與一氏所藏

去十九日之注進狀、具令披見候、

一黑瀨（東宇和郡）之儀落去不及是非候、併內々弱々敷趣之由候條、不及申候、道後ゟ追々令注進之由肝要候、平賀、木梨方之儀差渡候、其外南方以下爲撿使明後日廿八日渡海候、道後への爲使、兒（兒玉元良）三右、井又（井上春忠）右進置之候、其表加勢之儀、追々無緩候條、可得其心候、其方事長々辛勞之上、此節別而心遣之段、令察候、涯分不可有緩候、迚も各差渡候間、不能詳候、謹言、

十月廿六日　　輝元（花押）

桂兵

吉見廣頼ノ人數三百ヲ伊豫ニ渡ス

〔萩藩閥閲錄〕六十八 三隅勘右衞門

今日被罷下候哉、來春ハ頓可被罷上候、仍廣頼（吉見）上國之儀者、聽而以使可申候、與州へ先廣頼御人數三百被差渡候而給候樣こと、今日以飛脚申候條、其通を被仰付候樣可被申候、道後之儀つね〳〵火急之仕合候條、追々人數差渡事候、早速御人數被差渡候樣、礑可被申理候、不可有緩候、〳〵、恐々謹言、

十月廿九日　　輝元 御判

養仙（三隅藤八）まいる　　てる元

○輝元、伊豫來嶋出兵ノ日次決定ヲ桂元親ニ報ズルコト、九月十一日ノ條ニ、援軍ノ派遣ヲ元親ニ報ズルコト、十一月六日ノ條ニ見ユ、

龍造寺政家、使ヲ島津忠平（義弘）ニ遣シテ降リ、誓書ヲ呈シ、兼ネテ大友義統ノ兵ヲ討タンコトヲ請フ、仍リテ、忠平、使ヲ義統ノ將戸次道雪等ニ遣シテ、撤兵ヲ求ム、是日、忠平、肥後高瀨ヲ發シテ、鹿兒島ニ歸ル、

〔上井覺兼日記〕（日向日杵郡）十九　拾月、

一十四日、縣之土持彈正忠殿より爰元在陣辛勞之由候て使書到來候、卽相應之返答仕候也、天滿宮大鳥居信寬法印より使僧預候、幷書狀到來候、趣爰元出張故音信候、天滿宮社家一

天正十二年十月十九日

忠平城一要ノ陣所ヲ訪フ

龍造寺政家秋月種等ノ使者來ル

龍造寺政家同家晴鍋島信生等致ス神文ヲ

大友氏ノ使ヲ提議ス

篇之儀候間、御祈禱卷數預候、自今已後崇敬可申之由也、梅花香一箱送預候、相應之致返答候也、使僧參會候て御酒寄合候也、此日武庫様(忠平)城一要陳處へ被申請候、其歸さに忠棟へ御立寄被成候、我々も可參之由候間、其分に候、御茶湯會尺也、種々御閑談共也、

一十五日、看經別而仕候、諸所御地頭衆、一所衆、其外衆中達各禮承候也、龍造寺、秋月、筑紫(廣門)より和平御祝言之使者夜前著津也、意趣稼新、上原長門守兩人へ被聞せ候、於武庫様御宿に各打揃談合也、就意趣今度御幕下に罷成、和平之儀懇望申上候處、改先非無二御奉公之段申上候故、御宥免之由被仰出候、忝之由也、○義久、政家ノ和ヲ請フヲ許スコト、九月二十七日ノ條ニ見ユ、就夫向後別儀有まし

き之神文正(政)家を始、家晴(龍造寺)、鍋嶋飛驒(信生)守武庫様へ差上候、幷馬太刀各々進上申候也、將亦豐後衆筑後表へ在陳候、是非共に此度彼衆被討果候て可然候、其故ハ豐衆より龍造寺へ申候處、大友家之事ハ於日州數萬騎討せ、對御當家鬱憤深重候、○大友宗麟、島津義久ト日向耳川ニ戰ヒテ敗ル、コト、六年十一月十二日ノ條ニ見ユ、龍之事も去春隆信戰死之上者、遺恨定而同懷たるへく候、○隆信、島津家久、有馬鎭貴等ト肥前島原ニ戰ヒテ敗死スルコト三月二十四日ノ條ニ見ユ、肥後國何としても薩摩衆進退候ハぬ樣に、兩家談合を以有度候、左候ハヽ、八城(代ト同ジ)、求麻弓箭巷たるへき之由重々被申理候、依夫龍家中之者共も區々に雖申候、政家意分に大友家之事者神慮天道をも不用、我に利さへ候へハ愀變之儀每々候、御當家之事ハ承及候、被仰談候てよりハ向後御相異無之之由候間、遺恨をも止候て此方賴存度通候て如此候、然者豐後之

忠平老臣等ト議ス

島津氏ハ大友氏トハ京都曖ニテ和平ノ委ナリ

大友勢ニ退陣ヲ要求ス

宇佐八幡宮社衆大友氏ノ無道ヲ訴フ

事必竟御敵一定候條、適足遠指出候時、被討果候て可然之由也、又ハ豐後之衆事討果れ候へと申候ても、薩摩衆筑後まて御打出候儀者如何候する哉、其故者肥後之事此間曖候て存候、賛人なと候ても一向用に不立候、何篇彼等之衆御賴被成候ても本有まし く候、然者大向之御人數を筑州まて申請候するとハ難申候、隈(親泰)部方入魂さへ候ハヽ、豐後衆歸陣之事ハ一圓成ましき由共也、此日武庫様御宿にて終日御談合也、出合候處者、此度御出勢も日限有盛候、其上不知案内之人數と相交、豐後陣へ取懸候する事も如何候、又從爰越年共候する程之長陳、是又無用意にて成ましく候、殊に豐後とハ京都御曖にて和平之姿に候、○織田信長、島津、大友二氏ノ和ヲ圖ルコト、天正八年八月十二日ノ條ニ見ユ、然處に大守様之御意をも請られす、歴々爰元へ御座候とハ申なから、御手色を豐州へあらはされ候する事も如何候、彼是各無納得候、然者使僧を以豐後衆へ早々陳曳せられ候て可然候、其故者肥前よりハ豐州衆輕々(与)物ふかく打出候、殊に歴々在陳候、彼衆被討果可然之由支而申候、併大友殿へ當時被仰談之條、御同意無之候、筑州表辭退候て不引退候ハヽ、當邦へ隔心之基まてに候之段、稠被仰渡、諸勢者早々御歸陳肝要之由出合候也、此晩忠長、忠棟、拙者へ御茶湯會尺被成候、此外御談合衆へハ別座にて御酒御振舞也、

一十六日、此日も終日武庫様御宿にて御談合也、秋月傳に、宇佐八幡宮社衆より忠平様へ書

秋月種實ノ使者覺兼ヲ訪フ

狀を以被申上候趣、大友家當時無道耳候、今分ニ候ハヽ神慮破滅程有間敷候、然ニ御當家御出張目出候、豐州御退治之御才覺肝要之由也、彼御神弓箭守護被成威德共細碎書載也、御祈禱卷數相添候也、

一十七日、義虎拙宿へ申請候、座躰、客居薩州、吉利總州、山田新介、鎌田源三郎、白濱次郎左衞門尉、主居忠長、忠親、本田彌六、拙者也、種々御會尺共申候、義虎酒肴御持せ被成候、各賞翫申候、閑談共也、此朝城一要より無音候とて酒肴被持せ候、此日秋月殿より之使節禮ニ被來候、即參會仕候　座躰、客居小御門大和守（使者也）、新武州、內田九郎左衞門尉（是も使者）、主居拙者、猿渡越中守也、從秋月殿太刀馬料と候て銀子六兩預候、書狀太刀小御門方被渡候、柏原左近將監被請取候、小御門方より太刀百疋持せ也（候脫カ）、自身被渡候、是も柏將被請取候也、御酒なとにて良久閑談共也、此晚忠棟於宿元御談合也、麟臺御同心ニ參し候、小代殿寄合被成候、其間ニ風呂ニ入候、從夫終夜談合共也、豐後陳へ善哉坊、金乘坊使僧ニ明日被越候、意趣御談合候て被仰聞條々多々候、難盡短筆、併題目者龍造寺一兩年已來、秋月種實中取にて、和平懇望候、殊此度者永々御當家幕下たるへき之由懇篤候、肥筑之事此方公領として搭護之段被申候、然者被任其旨候、就夫豐陳衆之事、深々敷被打入候間秋月、筑紫、龍其外通路之衆一致ニ談合候て、一人も不殘可討留之由被申候、雖然豐後と當時被仰談間ニ候處、何條篇目も

島津勢ハ八代ニ退クク
大友勢モ豐府ニ退クベシ

大友氏ノ陣ニ使ヲ遣ス

若衆中寄合

幸若與十郎

政家ノ使者副島長門守

候ハぬに戰隔一圓ニ有ましき由申離候、さてハ左右方平均之儀候條、爰元在陣之諸勢先々八城邊まて曳歸候、豐後衆之事も早々如豐符（府）被引退候て、肝要候、若々御辭退候ハヽ、當郡（邦カ）へ御隔心之始たるへき由也、

一十八日、觀音へ別而讀經等申候、此日吉利殿、山田新介兩人隈部殿へ爲祝禮使ニ被指越候也、幷條々談合之儀共被仰渡候、彥山座主（參有）より使書預候趣、政家之事度々侘被成候處、御宥免忝之由也、織筋一到來候、此晚鹿兒嶋若衆中寄合候、座躰、客居伊集院掃部助殿、伊地知治部少輔、和田玄蕃助、岩永玄蕃助、市成掃部兵衞尉、主居佐多宮內少輔殿、拙者、伊集院左近將監、長谷場織部佑也、種々閑談にて御酒也、御小者四人爰元へ逗留申候間、召寄候て乍勿論別座にて振舞候、御酒召出候て振舞候也、

一十九日、小代殿、大津山殿、臼間野殿寄合申候、座躰、客居大津山殿、本田刑部少輔、幸若與十郎、主居拙者、小代殿、伊地知備前守也、種々閑談にて御酒也、臼間野殿ハ此方まて被來候へ共、俄ニ虫出合之由ニて被歸候也、此日秋月殿使者宿へ柏原左近將監殿使ニ遣候、同返事申候、太刀、織筋一進之候、使者へ太刀百疋遣候、彥山座主へ返書幷沈香卅兩（匁カ）進之候、是も柏將遣候、此晚忠長御宿にて御談合也、武庫樣、典厩之御事ハ、今夜之塩ニ御出船之由定候也、此日龍造寺之使者副嶋長門守拙宿へ禮義也、不在合候て參會不仕候、政家書狀幷太

横島守備ノ兵

刀馬預候、書躰今度御幕下たるへき由懇望申候處、種實媒介を以御免許珍重之段也、永々御愀變無之樣取合賴之由也、横嶋（玉名郡）へ御番ニ可被召置諸所被仰付候、北郷（一雲）殿、喜入（季久）殿、肝付（兼寛）殿、佐土原衆、都於郡衆、穗北衆、高城衆、根占衆なと也、此度御出勢ニ何も遲參之所々也、

忠平等高瀨ヲ發シテ國ニ歸ル

義久覺兼等ノ勞ヲ犒フ

一廿日、武庫樣、典厩夜前之塩ニ御出船之由也、龍造寺殿返事申候、敷禰越中守、副嶋長門守宿へ遣候、政家へ太刀一腰、織筋一進之候、返書之趣、當家幕下之儀懇望候故、被任其旨候、此等之祝儀承候、尤珍重之由也、忠長御宿にて御談合也、昨日從鹿兒嶋伊地知越中守爲御使者越著也、吾々長々辛勞故、此表之事無異儀及靜謐候、御滿足之由御禮蒙仰候也、此晩城一要より同名主計助を以承候、此間被仰談候、日來之本望之由候て刀預候、拙者不在合候て、使者ニ對面不仕候、軈而一要へ返禮申候へハ、餘々何と哉覽候條、一要息親綱へ此間無沙汰申之由申候て、市來野之栗毛進之候、敷禰越中守使ニ憑候也、長野惟冬子息へ其後無音申候と申候て、鐵放一張進之候、彼方より太刀一腰預候也、此夜乘船申候處、拙者乘候（船脫カ）餘大船にて、塩時惡候て出船不仕候、本田彌六殿同船申候、

覺兼高瀨ヲ發ス

一廿一日、塩相待候處、彌六殿手火矢にて水鳥射被成候、左樣之賞翫申、酒宴なとにて慰候、然處ニ軈而塩滿來候間出船仕候、今晩蓑之浦ニ泊候、先日此泊ニ來候折節之事共思ひ出候へハ、青山不改樣子、古人之楓橋之再宿なと存出候て、旅思を慰候也、

蓑浦出船

一廿二日、早旦蓑之浦を出船候處、麟臺より早船を以テ承候、一昨夜難風にて船餘多誤候、拙者遲著岸申候間、無御心元之由也、忝之由申候、從夫申之刻計德之淵へ著船申候、穗（稅）新、本刑、鎌源三郎殿、其外諸所之衆、拙者遲著船候間、無心元共おほされ候由共承候て來儀也、

德淵著船

有馬（鎭貴）殿爰元へ著津之由候て使者預候也、從此方も進之候、義虎御酒御持せ入御候、御閑談共候て酒宴也、此夜本田彌六殿同心申候て麟臺御宿へ參候、種々戲言共にて御酒也、深更ニ罷歸候、平濃州（平田光榮）よりも著船之由候て預使節候、

有馬鎭貴八代ニ來ル

一廿三日、如恒、地下衆御酒なと持來候、武庫樣御宿へ參候、御酒にて御物語共也、然處有馬殿被參候、御酒御寄合也、それ過候て義虎御宿へ御光儀之由御申候間、忠平樣入御被成、我々も參候て御會尺可申之由虎公（義脫カ）承候間、御供仕候、御座躰、主居武庫樣、義虎、奥之山左近將監、客居麟臺、拙者、松尾與四郎也、種々御會尺御茶湯なと也、武庫樣へ長嶋野之栗毛薩（義）州（虎）より御參せ被成、御閑談にて深行候て御歸鞍也、有馬殿拙宿へ禮ニ被來候、酒肴持せ也、（餘脫カ）不在合候て參會不申候、此日肥前之使者副島方穢新まて送之船歸帆させ候、中途にて自然不審之人も哉候すらん、曳付之一通賴由候間、一書認遣候也、此日從宇都（主）忠棟書狀預候、明日此表へ越著之由也、

忠平宿所ノ酒宴

龍造寺家晴鍋島信生誓書ヲ島津氏ニ致ス

一廿四日、地藏薩埵へ看經別而仕候、有馬殿宿へ禮申候、御酒寄合也、從夫忠長御宿ニ參候て種々雜話共也、武庫樣より御使也、趣者從肥前龍家晴、鍋島飛驒守神文指上候、高瀨にてハ御繁多故無御返書候、爰元より御返答可有之由也、然者御案文等見儀申せとの儀也、存分共申候、將亦爰元御滯在無御納得候、とても何たる御談合出合候ても直ニ又御在陳等、諸勢以可難成候間、先々明日渡御歸宅可有候、拙者へ御内儀蒙仰之由也、此日平田濃州御禮とて入御候、御酒預候也、卽參會申候、此晩有馬殿拙宿にて寄合候、座躰、客居鎭貴、平田新四郎殿、鎭貴舍弟鎌田源三郎殿、敷禰越中守殿、主居本田彌六殿、拙者、平田豐前守殿（宗位）也、種々酒宴にて閑談也、鎭貴より南蠻犬預候、寔ニ珍物之條、見物衆異于他候、義虎、麟臺御同心にて犬御覽のため入御候、薩州御酒被下候、種々御閑談共にて深更及酒宴共也、此夜武庫樣より竹下方にて蒙仰候、今日龍造寺殿へ可被遣御神文樣子御尋被成候、家晴、鍋嶋へ之御神文も同前たるへく候哉、委筆者へ意見を加申せのよし候也、斟酌千萬ニ候へ共、御尋之上辭退難成候て、竹下方御右筆にて候間談合申候也、忠棟從小川書狀預候、今日彼處被著候、諸勢罷歸候條、武庫樣早々御歸鞍之由申被成候、爲存知候由也、當者麟臺、拙者事者、善哉坊豐陳へ被指越候、彼一到來相待候て可然之由也、

鎭貴南蠻犬ヲ覽兼ニ贈ル

一廿五日、天神へ別而祈念令申候、平田殿へ御禮ニ參候、種々御會尺共也、忠棟越著之由承候

伊集院忠棟八代ニ來著ス

間、彼宿へと存候處、宮之原縫殿助所へ風呂之由承候間、人を進之候、至而用段之儀無之候へ〳〵、先々旅宿へ可罷歸之由承候條、其分候、併樣子等可承のため、愚弟源左衞門尉參せ候趣、拙者ハ就神慮之儀在所へ無餘儀隙入事候、此段度々申理候、雖然無御納得之條、今迄相待申候、若者不入事にもや、左も候ハ〳〵明朝歸宅可仕之由申候也、返答、善哉坊一到來相待候て可然おほされ候、乍去神慮之儀候間、一人雖召置、拙者ハ先々歸宅申候て肝要之通承候也、上原長州（尙近）同心申候、兩人共ニ忠棟へ面談不仕、空德之淵迄歸候、文王弟武王子成王叔父と哉覽承傳候事、感淚至極〳〵、柳ハ綠、花ハ紅のいろ〳〵、此晩忠長より可參之由候て參候、有馬殿御寄合之由候つれ共、忠棟へ禮被成候へハ隙入事候間、今晩ハ參ましき由候、從夫拙者と御茶湯共被成御慰也、閑談共申候、

一廿六日、曉塩ニ德之淵出船候、酉刻計水俣（肥後葦北郡）へ著候、地頭古墻大炊大夫殿より使預候、其身ハ泉へ被參候、留守之由也、秣薪なと被持せ候、海邊ニ宿仕候、亭主御酒なとくれ候、此夜古大炊大夫殿女中より御酒預候也、

德淵出船水俣著船

水俣ヲ發ス

一廿七日、早旦從水俣打立候、山野（薩摩伊佐郡）にて破籠受用候、飫肥衆、玉泉坊、井尻方なとへ御酒振舞慰候て、馬越田中之大宮司處へ著候、御諏方へ參詣申候、大宮司御酒なとくれ候、

一廿八日、早朝馬越打立候て、三ケ之山（野下同ジ）（日向西諸縣郡）へ著候、

三ケ野著

宮崎ニ歸著

龍造寺家晴モ忠平ニ神文ヲ致ス

天正十二年十月十九日

一廿九日、早朝三ケ之山打立候、本庄萬福寺（東諸縣郡）可立寄之由候間、其分ニ候、種々會尺也、薄暮ニ彼方打立候、戌之刻計宮崎へ歸著候、中途まて衆中なと被出合候也、

右書當時〳〵任筆記置候間、後見嘲哢無是非候、殊更再覽不仕候條、落字等可有之候、御推察肝要候、

以上

〔後編〕薩藩舊記雜錄〕十五 御文庫二番箱中、義弘公二卷中

雖未得御意候令啓入候、仍秋月種實以媒介（龍造寺）政家事貴家被得尊意候、珍重候、殊御神載之趣尤目出候、因茲拙者以下茂爲可得貴意、以神名申入候、乍恐御同意所仰候、仍御太刀一腰幷馬一疋令進入候、誠表御祝儀計候、猶連々可得御意候、恐惶謹言、

天正十二年カ（朱カキ）十月十二日　龍造寺（朱カキ）家晴（花押）

嶋津兵庫頭殿
御陳所

〔藤龍家譜〕四　龍造寺十八代藤原政家公　同月（十月）中旬、島津義弘ノ肥後ノ旅陣ヘ御使者ヲ遣サル、是ハ先君御戰死ノ後、早速御吊軍成サルベキ所、秋月長門守色々理ヲ盡シテ申止メラレ、其上島津、龍造寺ト中和ヲ調ヘ、互ニ和平ノ禮トシテ、使者相立ラル、御當家ヨリノ御使者肥後ヘ差越サレシ所數日歸リ來ラズ、因テ秋月長門守ニ御問合アリシカバ、種實神文ヲ呈ス、文ニ云

再拜々々、敬白天罰起請文

一夫意趣者、今度副島長門守方高瀨薩州陣ヘ爲祝儀被差渡候之處、薩州衆如八代同心候、被留置候之儀、爲我等聊薩州衆ヘ令內談、留置不申候事、

此旨於僞者、

十一月三日　秋月種實 血判

龍造寺殿參

○忠平、軍ヲ肥後吉松ヨリ高瀨ニ移スコト九月二十四日ノ條ニ、政家肥後ヲ島津義久ニ致シテ、和ヲ求ムルコト、同月二十七日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔上井覺兼日記〕十九　拾月、

一十一日、如恒、從忠親可參之由候間參候、御座躰、主居義虎、忠親、本田刑部少輔、伊集院伊與介、客居拙者、伊地知伯耆守（重秀）、八木越後守（昌恒）、種々御會尺御酒宴也、忠棟宿にて御談合之由

高瀬ノ町衆覺兼ヲ訪フ

候間、各指揃談合共也、風呂燒せられ候條、吾々入候て慰候也、高來三會（肥前南高來郡）より出家衆なと御酒持せ被來候、同安德殿より音信之使也、肴預候、當町衆別當其外一兩人指出候、織筋一、鵝目二百疋爲祝物持來候、

十月廿七日和泉出馬ノ豫定俄ニ坂本ニ赴ク

一十二日、藥師善逝へ別而祈念仕候、諸所物數付させ候、當寺（願行寺カ）之住僧一兩人被來候而、爰元諸寺家之樣子なと物語候、御酒寄合候也、此日雨中徒然ニ候條、宮崎衆中呼集候て終日雜話共候、各へ御酒振舞候、茶湯なと也、從宇土殿雨中徒然ニ居候覽とて、酒肴持せられ候、卽使者之前にて賞翫仕候、合志殿より其後無沙汰候とて、肴一種持せられ候、卽使者へ御酒寄合候也、從典厩御使候、明朝武庫樣へ御酒御寄合候する、參候て御會尺賴被成之由也、

二十日、癸亥、羽柴秀吉、大坂ヲ發シテ、近江坂本ニ赴ク、

〔顯如上人貝塚御座所日記〕○山城　一秀吉十月廿七日、泉州表出馬必定之處、東國表より注進アリテ、俄廿日ノ晚ヨリタ、五騎にて坂本迄御越云々、其後風聞ニハ無差儀、秀吉坂本ニ御逗留、北伊勢ニ不審之儀アリテ、一城被申付由其沙汰有之、

○秀吉ノ兵、石川數正ト東美濃ニ戰フコト、十月十八日ノ條ニ、秀吉、紀伊出馬ヲ一柳末安ニ報ズルコト、同月九日ノ條ニ、北伊勢ニ出ルコト、同月二十三日ノ條ニ、德川家康、尾張清洲ニ出ルコト、十一月九日ノ條ニ、秀吉、織田信雄及ビ家康ト和ヲ講ズルコト、同月十五日ノ條ニ見ユ、

登壇受戒セザル者ノ四度傳受ノ恣ニ灌頂ヲ行フコト

二十一日、甲子、青蓮院尊朝法親王、諸國末寺中法度ヲ定メ、關東ノ末寺ニ下シ給フ、是日、之ヲ下野日光常行堂ニ頒チ給フ、

〔門主傳〕二十四○華頂要略十三所收　龍池院（尊朝）二品法親王

九月、（天正十二年）門跡之諸末寺中法度之事定之、先關東末寺中遣之、○下略、天正十二年九月日附法度ニカヽル、次ノ輪王寺文書ニ同ジ、

〔輪王寺文書〕二○下野　常行堂舊藏

御書寫

諸國末寺中法度事

一近年無登壇受戒之儀輩、四度傳受之由其聞在之、戒行濫吹之基、何事如之哉、堅可制止之、猶以無承引者、臨于入壇之期、遂糺決、師資共可衆拔事、

一末寺中或起於我執、或任于己情、各別灌頂執行云々、所詮於新儀者、可爲非例者歟、向後於相催末流者、早可處盜法之印信事、

一台宗之移于眞言門數輩在之云々、台家陵廢之源也、太以絕言次第歟、自今以後、國郡寺號可注進之、屆于彼本寺、件徒黨可令追放事、

台宗ノ者眞言宗ニ移ルコト

右條々相觸于諸寺家中、堅可禁止之、違背黨類在之者、其門流可令追出之者也、

天正十二年十月二十一日

天正十二年十月廿一日

天台座主二品御判 親王

近衛信輔信尹、山城吉田ノ春日社ニ參籠ス、

〔兼見卿記〕七 十月十九日、壬戌、神龍大明神へ侍從(吉田兼治)參勤之、出京、參近衛殿(信輔)、御對面、明後日、廿一日、社頭春日へ可有御參籠之由仰也、

廿日、癸亥、近衛殿へ以使者、明夜御參籠之儀尋申、治定之由御返事也、可被參神供歟之由申入、卽被仰付之由也、

廿一日、甲子、今夜神供之義神人各申付之、料自近衛殿御下行、及暮御參勤之旨御案内、兼而

啓白ノ内名乘ハ自筆

祓殿ニ疊ヲ敷、屏風ヲ立誘置之、後刻予、侍從著冠齋服、兼有、兼之、定繼已下布衣、雜色二人著狩衣、持松明前へ行、各參勤、於御前沓ヲハク、侍從同前、次内府(信輔)へ申御禮、啓白之内御名乘御自筆ニ遊之、次著祓殿、予、侍從、兼有、兼之、定繼等庭上ニ敷圓座著之、屢祈念、次神供備前、次第如常、予奉幣、此已後侍從著奉幣座讀啓白、次退下、次兼有於此座祝(座カ)ト此時拍手、次徹(撤)神供、次行食會、次退下、此時御幣予持參御頂戴、次歸宅、侍從參神龍(脱カ)備神供、末社等如常備前神供了、

令歸宅、著直垂又參社頭、獻一盞了、御肴等用意之、御茶湯持參及深更歸宅了、

坂上某從軍ス

廿二日、乙丑、早天御使、直ニ還御、綿一屯拜領、忝之由申入了、後刻以書狀先御禮申入了、

○信輔ノ父龍山、奈良ニ隱ル、コト、三月十五日ノ條ニ見ユ、

筒井定次、兵ヲ率ヰテ、大和郡山ヲ發シ、東國ニ向フ、

〔多聞院日記〕廿一○大和 十月廿一日、

一筒井四郎國(定次)召具(兼給カ)、今朝出陣了、東國衆出張由也、

〔春日社司祐國記〕○春日神社所藏 十月、

十丁卯廿四日、雨風在之、

一入合時分坂上殿ヨリ米五斗持上之、粉骨ニ二升五合ノヤクソクナレトモ、雨風一段儀間、三升下行ヒラキノ也、與五郎へ、（十合升ニ此方ノ升ニ五斗一升在之、）

同坂上殿ハ陳立ニテ御返事無之、米五斗ヲ返事候、代官マコ大夫被申者也、

二十二日、乙丑、權大納言飛鳥井雅春ヲ罷ム、

〔公卿補任〕五十 權大納言正二位藤雅春、六十五、十月廿二日辭、

龍造寺政家、舊ニ依リ、麟圭ヲシテ、筑後高良山座主職ヲ安堵セシム、

〔高良山座主坊文書〕○筑後 高良山座主御坊一跡之事、先年親(定尊)ニ候之者以同判申談候上者、今以新雖不及申合候、就今度

良寛逆意、○良寛、大友義統ニ應ジテ、筑後來目、安武等ニ戰フコト、八月二十八日ノ條ニ見ユ、被持捨之儀、御口能之段無余儀存候條、弓箭一著之刻御知行肝要候、彌可被抽御忠貞之事此節候、万吉恐惶謹言、

天正十二年十月廿二日　　政家（花押）

龍民太（大）

政家

高良山座主御坊參、御同宿中

○龍造寺隆信、鎭賢（政家）父子、麟圭ヲシテ、筑後高良山座主職ヲ安堵セシムルコト、七年正月二十日ノ條ニ見ユ、

二十三日、丙寅、羽柴秀吉、近江坂本ヨリ北伊勢ニ出ヅ、織田信雄、尾張清洲ノ守將酒井忠次ニ之ヲ報ズ、尋デ、秀吉、同國土山ニ著陣ス、

〔家忠日記〕三　十月、

小坂雄吉

廿二日、甲子（乙）、柏井ノ小坂孫九郎（雄吉）見舞ニこし候、

廿三日、乙丑（丙）、清須へこし候、羽柴伊勢（秀吉）すちへいて候とて、信雄より御注進候、○酒井忠次、尾張清洲ヲ守ルコト、本月十六日ノ條ニ見ユ、

酒井家次

廿四日、丙寅（丁）、酒小五郎（酒井家次）見舞ニ被越候、

小幡市場

廿五日、丁卯（戊）、

廿六日、戊辰（己）、小幡市場ニ火事出來候、

廿七日、己巳（庚）、

廿八日、庚午（辛）、小坂孫九へこし候、

〔近江水口加藤家文書〕一　○近江

東美濃高山（土岐郡）表越節所敵取出候由候間、幸事候條、可討果（與運カ）至于坂本出馬候へ共、悉引取候由候間、不及是非候、途中迄出人數事候間、直ニ北伊勢へ明日出馬候、彼表儀頓可明隙候、然者其許（大垣）番等儀、彌不可由斷候、將亦楊柳壺、茶一袋遣之候、可賞翫候、猶追々可申越候也、

十月廿二日（天正十二年下同ジ）　　秀吉（朱印）

加藤孫六（嘉明）殿

秀吉ヲ坂本ヨリ北伊勢ニ出ヅ

家康ノ兵ヲ東美濃高山表ニ出ス

秀吉ヲ近江坂本ニ出ス

加藤嘉明ヲ大垣ニ守ル

〔幸田文書〕

東美濃高山表越節所敵取出候由候間、幸事候條、可討果（與運カ）至坂本出馬候へ共、悉引入由候間、不及是非候、途中迄出人數事候間、直ニ北伊勢へ明日出馬候、彼表儀頓而可明隙候、然者其許番等之儀不可由斷候、將亦楊柳壺、茶一袋遣之候、可賞翫候、尙追々可申越候也、

天正十二年十月二十三日

十月廿二日　　秀吉（朱印）

津田小八郎殿

〔吉村文書〕一　○肥前

筑前至北伊勢出勢之間、注進候、得其意、萬端可氣遣事專一候也、謹言、

十月廿三日　　信雄（花押）

吉村又吉（氏吉）郎殿

津田小八郎

信雄ハ秀吉ノ出兵ヲ吉村氏ニ報ズ

〔黄薇古簡集〕六　池田齋宮助家臣片桐半次右衛門所藏

今日至土山て著陳候、明日者神戸面可相越候、然者各人數城々ゟ悉召寄候而、番等儀無由斷可被申付事肝要候、於尾州調略子細在之間、可被申觸候、猶追々可申候、謹言、

十月廿四日　　秀吉（朱印）

片切半右衛門尉（朱書「此半右衛門ハ齋宮助先祖」）殿

秀吉ハ伊勢ニ著陣シ、土山ニ片桐半右衛門尉ヲ備ヘシテ警衛ニ嚴セシム

〔勢州軍記〕下　秀吉治世第十二

一勢北發向事、　同十月六日（天正十二年）、秀吉著陣勢州羽津（三重郡）、而拵直生（繩）城、以蒲生飛驒（賦秀）守爲城守、又拵桑部（桑名郡）城、以蜂須賀彦右衛門（正勝）尉爲城守也、信雄卿有對陣於中江、而濱田城瀧川下（雄利）總守、桑名城家康之侍坂井左衛門（政正）尉、石川伯耆（數正）守兩人被入置、日々有足輕戰、此時瀧川下總守以大船引込城中也、秀吉不審之、後總州給羽柴出頭之時問之、總州曰、君若令我城爲水攻、則乘船欲退云云、秀吉感之、誠武略之大要、走不視地者、顚東々西々之是也、夫水攻六角義賢始之、與其子息四郎義弼父子不快之時、天文年中、義弼籠江州肥田城、義賢先討捕佐原兵庫助、而後爲水攻云云、秀吉好之、數度用水攻也、

秀吉淺井等ニ砦ヲ構フ

〔寛永諸家系圖傳〕四十四　水野忠重藤十郎、惣兵衛、和泉守、同年十月、大權現（徳川家康）秀吉といまた和睦ならず、大權現兵を出さんとしたまふ時、忠重先勢州桑名町屋に往て、秀吉の大軍と川を隔て對陣す、秀吉も又桑名に入事を得す、其後忠重故あつて秀吉につかふ、秀吉忠重か桑名對陣の事を感し、又他年（多）大權現にしたかつて數度の軍功をあらはす事を賞して、石川出雲守數正（初ハ伯耆守と號す）、と同しく武者奉行たらしむ、○上下略

水野忠重ニ伊勢桑名ヲ隔テ川ヲ隔テ秀吉ノ軍防グ

〔細川家記〕七　忠興一　一十月（天正十二年）、秀吉公勢州に出陣、信雄に從ふ輩を討、○下略

○秀吉、大坂ヲ發スルコト、本月二十日ノ條ニ、神戸ニ著陣スルコト、同月二十五日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔柏崎物語〕中　一五幾内、中國は毛利と秀吉に隨居、扨秀吉濱田へ行、瀧川三郎（雄利）兵衛、三雲新左衛門（成持）は船にて用意して居、秀吉はまた美濃路へ出る、十月十四五日の比の由也、

水攻ハ六角義賢ニ始ルトノ說

瀧川雄利　三雲成持

天正十二年十月二十三日

織田信雄、坂井利貞ニ命ジテ、美濃小山築砦ノ用具ヲ徳川家康ノ將石河康通ノ許ニ急送セシム、

森久三郎方ヨリ請取ルベシ

酒井文書〕○三河

小山(加茂郡)之取出普請之道具共竹木以下、森久三郎かたより請取、早々石河長門守(康通)かたへ可相渡候、片時も可差急事(肝)簡要候也、謹言、

十月廿三日(天正十二年)　　信雄(花押)

坂井文助(利貞)殿

○家康ノ將石川數正、東美濃ニ出デヽ、羽柴秀吉ノ兵ト戰フコト、本月十八日ノ條ニ見ユ、

上總勝浦ノ正木頼忠、黑川出羽守ノ叛意ヲ報ゼシ朝井備中守ノ功ヲ賞ス、

朝井備中守正木頼忠ニ頼ル

〔三浦文書〕○紀伊

貴所拙夫家中ヒ御堪忍之内、御等閑申間敷候、御進退不相續時分、御他出被成度由、蒙仰候共、無相違暇を進可申候、此儀毛頭爲ヒ候者、法花經一々之文字可蒙御罰候、貴所一儀被被(脱カ)爲知候旨者、口外申間敷候、爲後日如件、

正木左近大夫

天正十二年十月十二日

朝井備中守殿御宿所

頼忠(花押)

一札

一今度黑川出羽守逆意之趣、拙夫ヒ被爲知候、御眞實之至畏入候、自今以後求候而貴所井御息ヘ無沙汰存間敷事、

備中守子息ニモ無沙汰セズ

一爲鹽味、岩廻田(奥隅都岩和田)之村爲私領進置之事、

備中守ニ扶持給ヲ安堵セシメ所領及ビ兵粮五十俵ヲ與フ

一當意之爲褒美、兵粮五十俵進置之事、付、此以前進置候扶持給相違有間敷儀、

天正十貳年甲申拾月廿三日　　正木左近大夫

朝井備中守殿進覽　　頼忠(花押)

二十五日、辰戌、羽柴秀吉、伊勢土山ヨリ同國神戸ニ著陣ス、尋デ、上部貞永ニ兵粮米、竹木等ノ調達ヲ命ズ、

〔可睡齋文書〕一○遠江

書狀令披見候、仍昨日至神戸(河曇郡)令著陣候、然者可見廻之處ヒ、兵粮之儀(脱アラン)、依之馳走延引段聞屆

天正十二年十月二十五日

竹ヲ伊勢楠マデ運バシム

柱材ヲ調フベシ困難ナラバ山田ニテ徴發スベシ

上部貞永ニ料所ノ納ヲ命ズ

候、此方へ不及見廻候、兵粮米事無由斷可入精事肝要候也、

天正十二年下同ジ十月廿六日　秀吉（朱印）

上部越中守（貞永）殿

其方之儀當陣へ相越候事無用候、

一もかり竹廿本ゆい、卅本ゆいほと成を貳千束（衍カ）、其元郷之竹のある所へあて候て、急切せ、五百束、六百束つゝ成共、河まて出置、なぎ次第ニ楠（桑名郡）まて可相越候、

一塀柱、柵柱なとニ成候木貳千本、是もうりかいニ成候共調可越候、さ様之調法難成候者、山田にて家一間より一本二本宛申付、先々是も五百本、六百本宛成共、成次第可相越候、不可有由斷候也、

十月廿七日　秀吉（朱印）

上部越中守殿

書狀幷貝鮑一折到來、祝著候、仍料所收納事、無由斷旨得心候、此方不及見廻候間、所務儀可入精事肝要候也、

十月廿八日　秀吉（朱印）

上部越中守殿

○秀吉、北伊勢ニ出ヅルコト、本月二十三日ノ條ニ、濱田ヲ圍ムコト、同月二十八日ノ條ニ見ユ、

fortaleza a este lugar: esperaua achar algum Christão seu amigo por quem lhe podesse mandar este recado, & folgo que o leueis vos, & porque sei que elle, & o Principe seu fllho estão alguma cousa differentes sobre este negocio de dilatarse a lei dos Christãos,ei de por nisso a mão pera os conformar, & se for necessario eu mesmo darei toda a aiuda que poder, pera se dilatar esta lei, este recado mandou logo el Rei Francisco ao padre Pero Gomes, & depois o mesmo fidalgo que o trouxe, o veo a contar ao padre mais por extenso.

No fim do anno passado de oitenta,& quatro,fez o exercito de Bungo algumas boas cousas, especialmente em as terras de Aquinzuqui seu grande, & capital imigo, mas nunca lhe ousarão sayr das fortalezas: finalmente restaurou a maior parte do reino de Chicungo, que antes perdera: & este Xibata Lino de quem acima falamos fez marauilhas em algums encontros, que antes disto teue com os imigos, polo qual o Principe lhe deu suas armas de que veo mui contente a dar graças a Deos a igreja. Iunto de Funai tem o principe hum fermoso templo de Fachiman tido de todos por Deos das batalhas, ao qual tem estranha deuação, & reparte com elle largamente de sua fazenda,a elle atribue todos os bons socessos que tem na guerra, aconteceo que se deu huma batalha em o reino de Chicungo junto a outro templo mui sumtuoso dedicado ao mesmo Fachiman, que por aquelles reinos confins era mui venerado. Xibata Lino por ser tão bom caualleiro que por sua lança entre todos os senhores de Bungo val muito, passado o conflicto da batalha,em que ja os de Bungo hião vencendo,arremeteo ao templo, & poslhe fogo & com sua gente destruio quanto auia por ali junto delle, o qual vendo algums gentios se indinarão, & lhe d sserão se se lembraua quanta reuerencia, & acatamento fazia o principe a Fachiman, & a suas cousas: Lino como não deue, nem teme, respondeolhes,

não sabeis o que dizeis, porque o Fachiman que o principe adora he de sua parte, & mora la em Funai, mas este que eu estou destruindo, & queimando he imigo, & por isso o trato desta maneira, & posto que o principe o não deixou de sentir com tudo dissimulou pola necessidade que tem de tão esforçado soldado.

Entre outras cousas que em aquel a guerra acontecerão aos Christãos dignas de notar, apontarei somente duas. A primeira que estando hum criado de Gonçalo Faiaxidono genro del Rei Francisco quatorze,ou quinze passos iunto de seu Senhor de fronte de hua tranqueira dos imigos a qual dauão assalto, estaua tambem outro criado deste mesmo senhor detras deste iunto com elle, & tirando os imigos huma arcabuzada sem tocar no primeiro acertou em o segundo, que estaua detras, & logo caio morto, & como erão tão espessos os tiros,não tardou muito a vir outro, que derribou ao outro, & todos o tiuerão por morto como ao primeiro,mas elle dahi a pouco tornou em si,& buscandolhe a ferida acharão que o pilouro lhe passara o vestido & lhe fora dar em hum reliquario que traz a metido em huma bolsinha de couro & passando a bolsinha, não passou o papel em que estaua enuolto hum pequeno de Agnus Dei com outra reliquia, nem lhe deixou sinal algum em o corpo, estando como disse não mais que quatorze, ou quinze passos do lugar de que lhe tirarão, & seu senhor admirado deste beneficio,sendo mui bom Christão trouxe o reliquario & o pelouro,amostrar ao padre Pero Gomes.

Outro Christão tinha costume de se encomendar cada dia da somana a hum Santo, tendo pera toda a somana sete Santos cuios nomes trazia escritos em huma tauoinha dependurada na cinta tirataolhe tabem de perto hua arcabuza da os imogos; & acertarãolhe em a tauoinha onde tinha escritos os nomes dos Santos, & não lhe fizerão mal nenhum.

大日本史料　第十一編之九

昭和二十七年三月二十日印刷
昭和二十七年三月三十一日發行

豫約價　八百圓

著作權所有

編纂者　東京大學　史料編纂所
發行者　東京大學
發賣所　財團法人　東京大學出版會
振替口座東京五九九六四番
電話小石川(85)〇八八〇番

印刷　日本印刷株式會社
コロタイプ印刷　株式會社　大塚巧藝社
製本　株式會社　松岳社

DAI NIPPON SHIRYO

(Japanese Historical Materials)

PART XI. VOLUME IX

European Materials

SEGUNDA PARTE DAS CARTAS DE IAPÃO QUE ESCREUERÃO OS PADRES, & IRMÃOS A COMPANHIA DE IESUS.*

De algumas cousas que acontecerão em as guerras de Bungo.

O Anno passado se escreueo, quanto ajudou ao exercito de Bungo contra seus inimigos chegar a elle o mais valeroso, e milhor capitão, que ha em aquelle reino, que he hum velho de mais de setenta annos. senhor, e capitão da mais importante fortaleza que el Rei tem, chamada Tachibana:este,& o capitão da fortaleza de Fomão restaurarão a Bungo, & gouernão agora ao principe. Aconteceo, que foi lá com hum recado do principe hum fidalgo Christão,chamado Lino, que he o Hercules de Bungo,& praticando com estes dous capitaes, lhe disse Tachibanadono, que he o principal: eu es ou confuso, porque disserão a el Rei Francisco que eu, & Fomão tinhamos odio a lei dos Christãos, sendo falso, porque ategora não fiz, nem disse cousa alguma contra ella, nem o podia dizer, porque não sei nada della,especialmente sendo el Rei Francisco Christão, & estimandoa, a quem eu toda minha vida serui, assi de Conixu, & de Ronju, como agora de capitão geral desta exercito, & ainda que eu o vira andar polas ruas como fora de si com huma cana bailando, me auia de parecer bem, & o ouuera de seguir, pois que he meu rei, & senhor, & por seu seruiço vim de minha

---

*cf. Japanese Materials, 10 *moon* 8 *day*, TENSHO XII.